愛って なんだ

げんじあきら

目次

●逃げることはできない
戦うことになる

●挑戦者

●フツウは戦わないかもしれない

●小さな挑戦者

●人の挑戦心

●戦う
愛の作戦

●愛はどうするのか

●泣くってなんだ

●なみだってなんだ

●不覚のなみだ
人は変われるか

●人は変われるのか

●１億６０００万年と４００年

●挑戦者をやっていてつくづく思う

●もっと挑戦者が現れないかと思う

●30 - 70にならないか
ホントは愛は何なのか

●愛は人を生き残せるか

愛ってなんだ

●愛をはじめて知った

私は、山に入ることが好きだ。巷でどんなに苦しいことがあっても、仕事で、どんなに大きな失敗をしても、私は、山に入ると、ソロバンのゼロクリヤーのようになる。
私は、辛いことも忘れてしまう。耐えてしまう。
だから、私は、頻繁に山に向かうことになる。
最近、私は、パソコンの前で、一心不乱に、文を綴っていることが多い。心配している。
私がゼロクリヤーされてないのではないか。
かなり以前のことだ。
私は、いつものように、八ヶ岳の赤岳に登った。新宿を夜行で出て、ゆっくり走って、電車の箱で眠って、早朝に茅野駅に着いて、バスを待つ。
５月の連休の八ヶ岳は、まだ寒い。涼しいのではなくて寒い。
６時何分かに美濃戸口に着いて、歩きはじめる。ものすごい解放感が急に襲ってくる。孤独感でもよい。単独行が、その時期は多かった。
私は、不思議だとは思った。
毎年、５月の連休は、赤岳に登っている。何から何まで承知している。私の庭のようなものだ。
しかし、様子が違っていた。少し登ると、雪が現れたのだ。ひょっとすると、失敗したかもしれないと思った。
今だったら、私は、ネット検索して、赤岳の状況を確認する。しかし、当時は、あまり多くの情報源がなかった。情報源がなかったこともあるが、私のよろいも厚かった。
「赤岳は私にとっては庭だ」と思ってはばからなかった。飲み会があっても、そのようなことを言っていた憶えがある。
私は、鼻高々だったのだ。
地図上の２日のコースを、いつも１日で歩き切った。道に迷うことなどな

い。
私は、完全に失敗したと思った。
冬山だった。もう５月の連休だというのに、赤岳は、冬山状態だった。私は、アイゼンを持って行かなかった。ピッケルも持って行かなかった。
すぐにわかった。私はピンチの連続になるとわかった。こんな５月の赤岳は、はじめてだった。
途中から、地面は、氷になった。土の地面などどこにもない。岩の上を歩く時だけが、氷がないのだ。
こんなことははじめてだった。
私は、行者小屋で休憩したのだが、それでも、引き返さなかった。今から思うと、どうしてあんなに自信が過剰だったのかわからない。
ゼッタイに、何かあるに決まっているのだ。
赤岳の急な登りを、滑り落ちないで登ることなどムリなのだ。滑ったら、かなり下まで滑落する。
自信過剰な人間は恐ろしい。
下をゼッタイに見ないのだ。どんなに靴が滑っても、何度も氷を踏みつけて、柔らかくして、一歩にする。
赤岳の頂上に着いた時、もう２時間も多く時間を使っていた。赤岳の頂上は、食べながら歩けるようなところではないのだが、おにぎりと水をほおばって、そのまま下った。県界尾根を下った。夜行日帰りの時は、いつも、県界尾根を下った。
ながい鎖場がある。全面雪なので、滑ったら終わりになる。アイゼンもピッケルもない。時間が気になった。時間をくってしまった。
鎖場を無事に通って、雪の斜面を横切るように、踏み跡があった。フツウは、ここは砂利道のようになっている。別の尾根に向かうのだ。
危ないとは思った。踏み跡と言っても、多分、１人くらいしか歩いていない。もっと上を通るべきだった。こんな雪の中、県界尾根を下る人なんかいない。
私は、踏み外した。踏み外してあたりまえのような傾斜なのだ。ピッケルがないとムリだ。
私は、そのまま、かなりのスピードで、滑った。滑ったというより墜ちた。

途中で岩に衝突しなかったのが幸いだった。
意識はしっかりしていて、スローモーションのように、墜ちて行く下を眺めていた。ブレーキを何も持っていないのだ。
それまで、もちろん木などなかったのだが、木と竹のブッシュの中まできて止まった。
意外と冷静な自分に驚いていた。
そのまま、私は、確認した。ザックは背中にあった。私は、足を滑らせた姿勢そのままで墜ちていったのだろう。見上げると、かなりある。
しかし、どこを叩いても、私はなにもない。もちろんヘルメットもしていなかったのだが、頭も打っていない。
私は、起き上がって、元の場所へ戻ろうと思った。また時間をくってしまった。
私は、驚いてしまった。足を踏み込んだのだが、雪が、腰の上まであった。
仕方なく、私は、右足を抜こうと思った。右足を抜こうとすると、左足が更にハマってしまう。
必死になって、なんとか右足を抜いて、落ちて来た方へ投げ出して、今度は左足を抜こうとした。
私の右足は、一気にブッシュにハマってしまった。雪に沈むのだ。幸いなことに、腰の上あたりで止まるのだが、この右足を抜くのに、また３分はかかってしまいそうである。
私は、一気に汗が溢れてきた。多分、このままやっても、脱出できない予感がした。時間切れの予感である。私は計算した。３分で１歩なのだ。30分でも10歩にしかならない。
とんでもない時間がかかってしまう。
ここで夜になったら、雪の中で、私は凍え死んでしまう。
私は、タバコを探した。
胸のポケットにあった。ライターもあった。グチャグチャだったが、残っていた。
私は、一生タバコには感謝するつもりだった。一生タバコを離さないと言っていた。誰もが、一生タバコを吸うのだと思っていた。それほど、その時のタバコには感謝した。

あの時に、タバコを吸わなかったら、私は、捜索隊に私の凍った身体を探してもらうことになっていただろう。
私は、脈拍数が２００くらいになっていたのだろうが、１００くらいまで下がった。落ち着いて、ゆっくりたばこを吸った。
私を襲ったのは、２つだった。
私は、どうしても声が聞きたくなった人がいた。どうしても電話をしたい人がいた。多分、留守電だろうが、声を残したかった。
私は、すごいことを閃いた。ゼッタイに、清里から電話したかった。ここを脱したかった。
私は、どうしても電話したいのだ。素直だった。
そして、すごい閃きを実行しようと、意を決した。どうせ、ここで、苦闘しても、夜になるのはわかっている。
私は、多分、木の枝に座ってタバコをしていたと思う。足は埋まっていなかった。シューズのスパッツもしてなかった。シューズの中は、雪が入り込んでいた。
私は、ザックを、キチンと背中に背負って、ベルトもキチンとした。タバコはザックの中に入れた。なくなると、助け舟がなくなる。
私は身なりを整えて、雪に飛び込んだ。平泳ぎをするつもりだった。
元来た道に帰ることが常道なのだが、とても帰れそうもない。ムリなのだ。常識を守ったら命を落としてしまう。
私は、はじめて知った。新雪では泳げることをはじめて知った。しかも、滑って止まったのだが、まだ傾斜がかなりあった。私は、泳がなくても、サーフィンのように、身体が、雪の上をすべった。私は平泳ぎの仕草をしていた。
私は、かなりのスピードで、雪の上を泳いでいた。そして、どんどん傾斜が緩くなって、私は止まった。立ち上がった時、雪の深さは30ｃｍくらいしかなかった。
私は、助かったと思った。少なくとも、命を落とすことはないと思った。
私は、振り返ってみた。私が泳いできた雪を振り返ってみた。
かなりの距離だった。ほんの10分の出来事だった。私は、足を掘り出す計算をした。時間の計算をした。しかし、たった10分で、脱したと思った。

私は、どうしても電話をしたかった。私を突き動かしている。間違いない。私にグッドアイデアを出させているのだ。
もう泳ぐ必要はない。私は歩けばいいのだ。しかし、私は、どこにいるか皆目見当がつかない。
それはそれで不安だったが、ここまできたら、どんなながい距離であっても、傾斜を下って歩くしかない。いつかは、線路にぶつかる。
電話番号は、完璧に記憶している。もう確実だった。これが愛の本質だとわかった。私は歩きながら、愛には、すごいチカラがあることを実感した。
私は、はじめて、愛とは、人が動く押しボタンだと、こころに書いた。これがはじめてである。
これ以来、私の愛に変化はない。
私は、一瞬おかしいと思った。考えながら歩いていた。愛について考えながら歩いていた。
私の身体は、一気に、水の中に落ちた。ゴウゴウと川が流れていた。私は、川を覆っていた氷の上を歩いていた。ドンと氷が割れて、私は、川に落ちた。瞬間に、私は、両手で氷の上に飛び跳ねた。私は、胸まで氷の上に出して、両手で身体を支えていた。
このままではまずいのだ。チカラ尽きたら、私は、氷の中の川にもぐり込んでしまう。
私は、川の上を歩いていることを知らなかった。音も何もしなかった。かすかに、音がした。おかしいとは思った瞬間に、身体が川に落ちた。
私は、どうしても電話をしたかった。
私は、渾身のチカラで、身体を、氷の上に引き上げた。
私が踏み込んだ３メートル四方くらいの穴が開いていた。ものすごい川の音がしていた。危なかった。ひょっとして、こうして川にはまって遭難する人もいるのだということを、はじめて知った。こんなぶ厚い氷を、川の中からでは、壊せない。
私は、ずぶ濡れだった。寒かったのだが、必至に歩いた。川を覆う氷がなくなった時、歩きやすくなった。もちろん道はないのだが、歩きやすかった。
私は、道路に出て、清里に向かった。必死に歩いた。早く電話をしたかったのだ。

「助かった、ありがとう」
ことばにならない。留守電では、感謝をすることもできない。
「もう死ぬかもしれないと思った時、あなたにどうしても電話をしたくなった」
「もしあなたにどうしても電話したくならなかったら、私は諦めたかもしれない」
「あなたは私の命を救ってくれた」
歩きながら、電話に出てくれたら、こう言うつもりだった。
しかし、留守電だった。
「助かった、ありがとう」と言っただけだ。
それでも満足だった。私は、重要なことを発見した。愛が何であるかを知ったし、私が何を愛しているかを知った。

●愛ってなんだ

「あなたの愛はなんですか？」
こう聞かれることはないのだが、もし聞かれたとしたら、このながい物語を話すことになる。
「愛は人が動く押しボタンです」
私は、愛について、これ以外の説明をすることはない。私を動かすものだ。私の動きの原動力だ。
逆に言うと、私は、愛がないことには動かないことになる。一見無関心になる。
私は、生死を分けてしまうような、辛い体験を、何度もしている。仕事上でも、何度もしている。なまなましくて、文にはできない。思い出したくもないのだが、忘れることはない。私の記憶の、不思議な空間に閉じ込めるしかない。
私が、仕事上で、無償の報酬なのに、生死を分けるようなことをやったのは、私は、自分で、説明ができる。
簡単である。
「私は、仕事を愛していた」

「私は、会社を愛していた」
「私は、その会社の向こうにいる人を愛していた」
愛は、人が動く押しボタンだから、私は、自動的に、生死を分けるようなことにでも、躊躇なく動いたに過ぎない。
ただそれだけだ。
成功時の私への報酬をイメージしたわけでもない。
私を知る人は、不思議なのだ。
「なんで？」
私は、多分、ずっと理解できないのではないかと思う。
会社という集団では、人が動く押しボタンなど、愛などあったら、生きいにくい。
「ダメでもグッドだと言い張るのがお前の仕事だ」
これが、会社では、正解なのだ。
正しくはないが、正解である。
かなり前だが、２人で下山していた。朝方で、岩が濡れていて、足元に拡がっている木の根も濡れていた。私も何度も滑っていた。相方が１メートルくらい滑って、そのまま、右の崖に墜ちた。細い尾根を下っていた。
私は、躊躇なく、同じ崖に飛び込んだ。身体が墜ちる前に支えないといけないと思ったのだろう。そこは崖だったのだが、もう１段の崖になっていた。単にそこまで滑っただけだった。
「何してんの？」
私は、わざわざ、崖に掴まっている相方を、突き落とす仕草になってしまったのだ。
彼女に怒られたのだが、私は、マジマジと顔を見てしまった。
あのまま、崖から２人で墜ちていた可能性もあったのだ。もちろん命はない。
愛は、人が動く押しボタンなのだが、動くまでわからない。
動いた結果で、愛していることを認識できる。
私には、こんなことを並べ上げると、キリがない。
『まゆ』を読んでいただきたい。
私は、子ども達と一緒に生活して、愛が何であるのか、揺るぎないものに

なった。
私は、よく考えないで動くと、指摘されることもある。当然なのだ。私は、私が愛することにしか、身体が動いたことにしか、行動しないことを、心がけている。
ゼッタイなどないから、心がけているとしか言えない。
今でも、頭で動いてしまうコトが何度もある。
心がけているだけだ。
私は、生意気なのだが、ヒット商品の曳き人だと言っている。そう言っているせいだろうが、商品について相談されることが多い。
「反応が良くないようですけど」
私は、こう言われてしまうことがある。
「儲かりますけど」
私は、ただ、自分の身体が動くかどうかを試しているだけだ。必死になって、提案されたことであったら聞く。自分で、必死になって調べる。
「すみませんが、私は身体が動きませんので」
ホントは、私は、こう言いたいのだが、言っても誰も理解できない。
「お客さんにプラスを探せませんでしたので」
私が提案させていただくことも多いのだが、提案されて、意見を求められることも多いのだ。
多分誰もわからない。
もし私の商品の考えが、何かに偏っていたら、私の身体が動くかどうかで、そのテーマを取り上げるかどうかを判断することは、最悪なことになる。
私は、それは自信がある。
商品とお客さんと会社などのスタッフの三方が、みんな一両得になることが、商品の本質の１つだと思っている。
２０１３年に顕著なのは、アキバの娘たちである。
アキバの娘達は、商品で、彼女たちみんなが、一両得であるし、彼女たちを支えている多くのスタッフたちもおもしろいし儲かるし、日本だけではない多くのお客さんも、彼女たちに元気をもらっている。つまり、三方が一両得になっている。
「素晴らしい実験をしているのですが、お客さになんかプラスになるのです

か？」
私は、こんなことを言うことが、最近は、多い。現在の日本では、こういうテーマが圧倒的に多い。生活者を三方の一方にしていないことが多い。
私は、商品は、新しい生活のシナリオライターだと思っている。
新しい生活を、生活者にイメージさせるものが商品で、その他のものは、物資である。物資は、ゴミの袋のように、タダが期待される。液晶カラーテレビは、単に、商品が物資になっただけの話しだ。商品だと思っていたら、見失う。
商品は、生活の定番になってヒット商品になって普及して、物資になる。これを覆すことなどできない。ヒット商品は、必ず物資になる。石油も物資になるはずなのだが、限りあることが、商品を維持させている。
鼻高く聞こえるかもしれないが、私の商品の考えは、市場経済社会にフィットしている。市場経済社会では、商品と生活者が主役である。
だから、私は、ゴチャゴチャ考える前に、私の身体が動くかどうかで判断した方が、当たる確率が高いと考えている。
私に優しい人であったりキレイな人であったりで、私の、商品に対する意見が変わるのだが、私の身体の方は、かたくなに、市場経済社会での、商品と、置かれている立場での商品を、的確に判断すると思う。
つまり、私にもよくわからない、私が持っている、商品についての私を動かすものに従った方がうまくいく。
時々、しがらみがあったりして、ムリをして選択する場合もある。身体は難しいと言っているのだが、頭が、それでも、ムリに、うまくいく道を探ってしまうことだ。
よい結果が得られない。
私は、時々、どうしてこのテーマなのだろうと考えてしまうことがある。
私の身体が動いたのは、なぜだろうかと思い返してみることだ。
フツウは、こんなことはない。自分の中に２つの考えはない。私は、自分の身体の動きに従うから、後から、自分の身体の動きを思い返さないといけない。
おおむね、私の身体の動きが、たとえば、三方一両得であったり、商品シナリオライター論であったり、私の商品論に該当していることが多い。

表面的な私は、時々、流される場合もある。
私の身体には、ブレがないように感じている。私に相談される方に、ダメなことはダメ、可能性が高いことには、やれるかもしれないと言える。
私は、このように、何事にも、私の身体が愛で動こうとしないことには、何もしない。
私は、今は、思いもかけずに、文をたくさん書かせていただいている。今も、『愛ってなんだ』を書いている。
私は、ヒット商品の曳き人の時と同じように、私の身体の動きに従っている。

●愛に対峙するもの

『人と集団を滅ぼすもの』を読んでいただきたいのだが、私は、小学校４年くらいの時から、私や私の係る集団を滅ぼすものを、おおむね察知していた。
おおむねというのはおかしいのだが、小学校４年生に、説明などできないシロモノだった。
私は、ずっと、頭から離れなかったわけではないのだが、私にも、人生でこれが最悪だと感じることが多くあって、滅びの実態を、確認してしまう。
これは、人の本質であって普遍である。
見えざる悪魔というものが、すべての人に存在していて、それはよろいに化して、人が生きる術の重要な１つになっている。重要な１つというより、すべてかもしれない。表面を飾って、表面だけを、他者から自分を見てもらうことで、共同で生きなければ生きられない人の生き方を全うすることだ。
本物の自分は、フツウは、どこにも存在しない。
過去に多くあった、いまでも続いている、人と人の争いは、すべて、どちらのよろいが立派であるのか、よろいを傷つけたバツを与えたい、などなど、よろいの出来事なのだ。
豹にはよろいはない。豹には、こころがないからよろいがない。豹は、争わない。争うことがあるとすると、オスやメスの奪い合いだろう。これは、生き物だから、遺伝子が目指す、これも本質的なことだ。

しかし、豹には、制覇だとか征服とか統一とか覇権とか勝利とかチャンピオンとか鍛練とか、こういうことばはない。人のことばは、ほぼ、よろいのことばで占められる。どんなことばを拾い上げても、争いのことばであることが多い。よろいのことばであることが多い。
残念だが、人は、１００年生きられない。必ず滅びてしまう。地球が私を滅ぼすのだが、それより前に、人は、自らの見えざる悪魔に滅ぼされることが常である。１００年ももたない。
人は豹のようには生きられないから、共同で生活するのだが、そこにできる集団でも、見えざる悪魔が１人歩きをするから、人個人の一生よりも、集団の一生の方が短いことがフツウである。
国家も集団の１つであるが、よろいを脱いで繋げれば、けっこうながく続く場合もある。
けっこうながくと言っても、せいぜい、江戸の３００年や、紀元前の王制度の１０００年くらいのものだろう。
すべては、滅んで、遺跡と文化だけを残す。
それが人であって、今後何億年経っても、これは変わらない。
しかし、これでは、まずい。
みんなが滅びたら、人はいなくなってしまう。昆虫などは、こころがないから、見えざる悪魔もいなくて、よろいがない。争いもない。
人がいなくなって昆虫だけになる地球を想像するのも辛い。
そうなのだ。今までの人間の歴史を勉強すると、誰でもが思いつく。４大文明発祥地がどうして現在の先進地域ではないのだろう。
こんな疑問を並べるとキリがない。ゼンブ滅んでいるのだ。世界に膨大な植民地なる不思議なものを配下にしていた国もあるが、滅びに向かっている。叱られそうだったら、滅びに抵抗しているでもかまわない。
世界に例外はない。
幸いなことに、地球上のほぼすべての地域に人が住んでいるので、どこかが滅んでも、地球の反対側の人達は元気だったりする。
１００年後には、北方アジアが静かになって、中東北アフリカが、市場経済社会を引っ張っているかもしれない。少しの解放感を得る苦悩をしている。
ほんの少し先の１００年先にでも、発火する可能性がある。

愛に対峙するものは、人を滅ぼすものしかない。
豹には、残念だが愛がない。こころは愛の器だから、豹にはこころもないことになる。
しかし、こころがなければ、人間は滅びない。人間を滅びに向かわせているものは、愛と同時に人に備わった見えざる悪魔である。
人は、豹などに比べて極端に優秀である。鉄砲だって原子爆弾だってつくれる。２足歩行にして前足を手にしたことが成功した。人間の遺伝子の勝利である。
しかし、多分、カミサマが危惧したコトは当たる。優秀な頭脳を与えたために、優秀な頭脳が人を滅ぼす。原子爆弾で、原発で終わりはしない。もっと先へ行く。先とは、人を自ら滅ぼす技術をつくってしまう。間違いない。カミサマだろうが、考えたことは正しい。
これではまずい。カミサマは、優秀な頭脳が自らを滅ぼさないように、ブレーキを与えた。このブレーキは、人がジャマだからいらないと言っても消せるものではない。
行き過ぎてしまう優秀な頭脳を滅ぼしてしまう見えざる悪魔だ。そして、もう１つ、愛だ。
愛は、構造的にタイヘンである。
もともと、愛は、あまりにも頭脳が優秀だからセットされたものだ。愛は、優秀な頭脳の先走りにブレーキをかけないといけない。２０１１年３月11日の福島原発の事故が、原発そのものが、優秀な頭脳の先走りではないかと、人の愛は、当然のこととして考えてしまう。あたりまえである。そのために愛はセットされた。
一方で、見えざる悪魔も、優秀な頭脳の先走りをチェックする。
見えざる悪魔は、優秀な頭脳を、一定の法則で壊すのだが、至ってシンプルな方法である。見えざる悪魔のコンセプトは、純粋になることだ。
会社だってどんな集団だって個人だって、鉛筆の芯を研ぐように純粋になっていく。ある意味、極める方向であるかのように見える。
純粋になって、鉛筆の芯が折れてしまうことによって、個人や集団は崩壊する。
会社も同じようになる。一つのヒット商品が、かえってそこに純粋になっ

て、時間がきて滅んでしまう。最近の半導体や液晶カラーテレビも同じである。商品についての考えが鉛筆の芯である。技術が凄ければ商品も凄いと考えていることが鉛筆の芯だ。
技術は商品の舞台装置に過ぎないから、技術がすごいことと舞台がヒットすることは関係がない。
なかなか、ここがわかってもらえない。
見えざる悪魔の作戦は完璧だから、人に歴史が始まって以来、見えざる悪魔に後悔させられなかった個人や集団などない。すべて滅んでいる。
見えざる悪魔と愛は、なんとか、人の優秀な頭脳のブレーキという役割を果たしている。なんとかである。まだ人の優秀な頭脳は、自らを滅ぼしていない。
人の優秀な頭脳と見えざる悪魔と愛との、微妙なバランスの上に、人は成り立っている。

見えざる悪魔

●恐竜と人間

地球上にはたくさんの生き物がいるのに、なぜ人間にだけに愛があるのか、すごく大事なところだ。

もし人間に愛がなかったならば、とっくの昔に、地球上には、食べにくい昆虫しかいなくなっていただろう。人は、水が苦手だから、水の生き物だけが、人間の食べ尽くす気力から逃れただろう。

昨日、日本カワウソが絶滅したと報じられた。

これはすごいことだ。

地球の生き物の最高権力者が、生き物すべての個人台帳をつくっているのだ。

豹など、決してこんなことはしない。

人間は恐ろしい。

表面的に、日本カワウソが絶滅して、悲しい雰囲気なのだが、事実上は、冷徹に、日本カワウソの個人台帳に、バツを記入しただけだ。地球上で絶滅した生き物は、数知れない。

人間は、不思議な生き物である。

どうして生き物の個人台帳などに興味があるのだろうか。食糧にしてきたに過ぎないのに、不思議である。食糧が少なくなってきたから、個人台帳が必要になってきたのだろうか。

人は、自分のやっていることを、キチンと理解していない。

地球上の豹の個人台帳が、多分できている。豹は、人間と対峙しなかったが、狼は、人間と対峙した。狼は、人間を食糧とみなしていただろう。

人の優秀な頭脳の怖さである。狼の習性を研究して、絶滅させることができる。

地球の狼は、今は、人間を、食糧などとは思わない。人間は、すぐに鉄砲を持ち出す。どんな些細なことであっても、人に危うい場面があれば鉄砲を持ち出す。

もう、地球上に、人間と対峙する生き物などいない。ウイルスが、時々、人間に対峙するかのようなふるまいをする。それくらいのものだ。
このまま時間が経過すれば、地球上は、昆虫と微生物しか残らないのではないかと予想できる。人間がそこにいるかどうか、定かではない。５０００万年くらい先の話しだ。
もし人間に、優秀な頭脳がなかったならば、地球の生き物は、もっと豊富だっただろう。数もすごかった。
地球の食物連鎖の頂点には人間がいる。
人間は、個人で戦えば、噛みつきサルにだって敵わない。おまわりさんを呼ばないといけない。
しかし、人は、集団行動ができる。ライオンだって５人で槍を持てば、勝てる。鉄砲があれば、１人だって勝てる。ほんの少し前まで象を一発の銃弾で倒せるヒーローを、みんな、喝采した。
バイソンを一発の銃弾で倒す西部劇のシーンを、カッコいいと思ったものだ。バイソンは、絶滅しなかったのだが、絶滅に追い込んだのは、人の見えざる悪魔であり、バイソンを復活させているのは、人の愛である。
人は、地球の食物連鎖の頂点の地位を譲ることはないので、象やバイソンが、自分達を謳歌する数などにはならない。ましてや、狼など、人と対峙した生きものは、自然繁殖など許さない。
人間だけが、生き物なのに、死んで墓に入る。他の生き物の食糧などにはならない。
どう考えても、人間しか生き残れない構図である。
恐竜と人間は、似ている。
地球の食物連鎖の頂点を維持することが、生きている最大の目標であったことで、似ている。
恐竜は、あまりにも増えすぎて、しかも大きくなり過ぎて、自分達を食糧にしなければ、生き残れなくなってしまった。
人間は、まだそこまでいっていない。大きくなっているのは同じである。大きい方が、生き残れる可能性が高い。人間がこのまま大きくなってしまえば、１億年くらい先には、あまりにも大きくなって、食糧を、自分に求めないとやっていけなくなる可能性がある。恐竜と同じ道をたどるかどうか、定

かではない。１億年くらい先の話しだ。
恐竜には、優秀な頭脳がなかったから、見えざる悪魔も愛もなかった。
残念だろうが、遺伝子の役割しか、恐竜にはなかった。恐竜の子孫が生き残れば、それですべてである。
人間の場合は、異なる。遺伝子の役割だけでは済まない。人間として生き残っても、愛が大きければ、人間らしく生き残ろうとする。ここが恐竜と決定的に異なる。
愛は、人が動く押しボタンだ。
バイソンが絶滅することに、なぜかしら自分の生涯を賭けてしまう人も現れる。恐竜には、そんな恐竜はいない。見えざる悪魔も愛もないからだ。
そして、その少ない愛が、バイソンを生き残らせた。
今では、バイソンの個人台帳があるだろう。
ゴリラだって同じだろう。
なぜだかわからない、少ない愛が、ゴリラを生き残らせた。
愛と見えざる悪魔は、ホントは、優秀な頭脳のブレーキなのだから、仲間である。しかし、現実は、見えざる悪魔は悪魔らしく、バイソンの絶滅をもくろむ。ゴリラの絶滅をもくろむ。日本カワウソの絶滅をもくろむ。象の象牙のハンコが使い易いという、いかにも見えざる悪魔らしい欲望のために、象は絶滅に追い込まれる。
みんな絶滅してしまえば、人間を滅ぼすことができる。人間ではなくて、人間の優秀な頭脳を滅ぼすことができる。
恐竜が地球の食物連鎖の頂点の何億年かの時代は、恐竜が食糧にできないくらいの小さな生き物しか生き残らなかったことは、容易に想像できる。そして、ついには、自分達を食べないといけなくなる。あたりまえである。自分たち以外は、みんな身体が小さいから、食糧にならない。
恐竜が生き残れなかったのは、当然だろう。

●地球制覇

人間は、恐竜とは異なる理由で、生き残れない可能性がある。
もちろん、見えざる悪魔のことだ。

恐竜には、地球制覇などといった野望はなかった。ただ、今日生き残るだけを目指した。それは恐竜の遺伝子の要請によるものだ。
だから恐竜は、強くなりたいから、日々大きくなっていった。今日を生き残ることの究極は、地球上での食物連鎖の頂点に立つことだ。
恐竜が滅ばなかったら、人間が現れたかどうか、定かではない。人間は、どう考えても、かっこうの恐竜のエサにしかならない。人間は、増えない。あたりまえのことだ。
恐竜がいなくなって、人間が、地球の食物連鎖の頂点に立つのだが、その過程がすごい。
べつに、人間ではなくて、狼が地球の食物連鎖の頂点に立つ可能性だってあった。
人は、コンドルにだって、子どもを食糧にされて困った。飛べないし腕力もない。
人間は恐竜と違う道を選んだ。
手だ。
手が槍に行き着いた時、勝負は決した。
人間が地球の食物連鎖の頂点に立った。
人間と覇権を争ったかもしれない狼は、毎日膨大な数が殺戮された。人は、狼を食べない。明らかに、人にとって狼は、食物連鎖の頂点を争った生き物である。
決着をつけたのは、恐竜のやり方とは異なる。大きくなることだけではなくて、それよりも、手を使うことを優先させた。槍や弓や鉄砲である。狼には、考えられないことだ。人間に与えられた優秀な頭脳の行く道である。
この人間に与えられた優秀な頭脳の行く道は、現在も、危うい。恐竜と似ている。
恐竜が、同じ仲間なのに、大きくなり過ぎて食糧に困って仲間を食べるようになったことと似ている。
人間という同じ仲間なのに、どっちが優秀か争う。恐竜よりも劣る。
人間は、狼を毎日襲ったが食べない。どっちが頂点にいるかの問題である。
恐竜のように、食べるモノが少ないという遺伝子の要請で、仲間なのに襲うこととは異なる。

単に、「オレが頂点だ」と、言いたいだけなのだ。だから恐竜よりも劣る。
ごく最近も、地球を２分して、「オレが優秀だ」と言って、殺し合った。人が、狼と地球の頂点を争ったことと似ている。
明らかに、見えざる悪魔に惑わされている。
恐竜は、こんなことはしない。
人は、食べないのに殺すのだ。
見えざる悪魔にとっては、どういう理由であれ、人が少なくなれば、優秀な頭脳が少なくなって、ブレーキ役を果たせる。
下手をすると、見えざる悪魔に、人は滅ぼされる可能性がある。
人をゼンブ殺しても、まだ余ってしまうほどの人を殺戮する兵器をつくってしまう。
恐竜にも劣る。
もし、人に愛がセットされてなかったら、もう、２０１３年には、昆虫と微生物しか生き残らなかったかもしれない。
人が、頂点を目指さなければ食糧にされてしまうプレッシャーは、とんでもないものを引きずってしまった。
恐竜が、仲間なのに食糧にしなくてはならなくなったことと似ている。
同じ人間なのに、どっちが頂点かを争ってしまう。
同じ人間だから、どっちでもいいではないかと、愛は、思う。決着をつけたがるのは、見えざる悪魔だ。
微妙な天秤状態が続いている。危うい。
地球制覇などということばがあることがおかしい。恐竜などはビックリするだろう。生き残るだけでもタイヘンなのに、地球制覇とはどういう意味なのか。何がしたいのかわからない。
これは、すごく哀しいことだ。人間以外にはわからない。
これは、哀しいことだ。恐竜がそうであったように、地球を制覇すると滅びる。人間の方が恐竜より始末がワルイ。
しかし、人間には、残されたものがある。
愛がある。

●エクスタシー

よく考えないといけない。

１９４５年に終わった世界を２分した戦いのことだ。おかしなことに、人と人が命を奪い合った。恐竜も、同じ仲間なのに、命を奪い合った。恐竜は食糧だから、いいとかワルイを別にすれば、わかりやすいが、人の場合は、意味がわからない。食べるわけではないのだから。

狼との地球の食物連鎖の頂点の戦いの様相である。狼は、地球上に、人間の数の何倍もいたかもしれない。ホントは、ライオンの方が狼より強いのだろうが、寒さがキライで北へ向かわなかった。ライオンは、強いが、人と隣り合わせに生きることなどなかった。

人は、狼をせん滅した。

１９４５年に終わった人と人の戦いは、人の狼のせん滅のようである。

人と人の戦いを戦争と言う。

戦争は、エクスタシーであって、見えざる悪魔がもたらすものだ。

エクスタシーは、考えて行動するものではないことである。ほっておいたら出てくる。

生き物が子孫を残したいための行為が典型である。

人には、数多くのエクスタシーが存在する。人が戦争をすることもエクスタシーである。

愛は、人のエクスタシーを利用しない。見えざる悪魔だけが、人のエクスタシーを利用する。

戦争をするエクスタシーを持つ人を、見えざる悪魔は、利用する。

美濃の殿さまだってパリの戦の天才だって、同じことをした。

おかしなことに、人は、戦争を仕掛けたりすることを、悪とは言わない。エクスタシーだから仕方がないと思うのだろうか。

戦い上手であることを戦略家などと言う。歴史的に著名な人だっている。どうして、人と人が殺し合うことが上手な人をもてはやすのか、さっぱりわからないと、豹は言うだろう。豹は、豹の仲間に罠を仕掛けたりしない。

しかも、罠が上手だと言ってもてはやすのだ。

これを、おかしいと言わなかったら、人間に未来はない。あたりまえのこと

だ。奇襲などということばもある。
人間の言葉のほとんどは、見えざる悪魔の言葉なのだ。
見えざる悪魔が、人の優秀な頭脳を滅ぼそうとしているのにもかかわらず、人間の数は70億人を越える。
もう人を襲う人は人しかいなくなったのだから、人の数が増えるのは当たり前である。
人の遺伝子は、こういう時代が来るなどとは思ってもみなかった。人は、あかちゃんを１人しか生まない。基本的には１人だ。少なく産んで大事に育てる道を選んだ。生まれた時に、コンドルにさらわれたり狼に連れ去られたりすることを、全力で防いだ。大人数で暮らすしか方法がない。大家族だった。
それでも襲われた。
だから、人は、生まれた時に、喰われそうな獣の匂いを覚えさせられる。声だって覚えさせられる。味だって、ヤバイ味を吐きだすように教えられる。生まれた時には、みんな備えて生まれてくる。匂いにいたっては、母親の匂いを１００％理解しているし、オレンジの匂いなどの安心な匂いを覚えて生まれてくる。
どれほど、生まれた時に襲われることが多かったのかを想像させる。
カミサマか遺伝子が、こんなに、人が生まれることを大事にした。生まれた直後を大事にした。
こんなに大事にされているのに、人と人が戦うことになったことを、カミサマや遺伝子は、どう思っているのだろう。
ちなみに、あかちゃんの時は、見えざる悪魔はいない。あかちゃんは、１００％愛の人なのだ。生まれ方を考えてもわかる。
それが、どうして、奇襲などといったことばを、平気で使うような人になってしまうのだろうか。よく考えないといけない。
おかしいのだ。おかしいというか、エクスタシーになってしまっている。だから、だれもおかしいとは言わない。

●特別な存在

人には、遺伝子的自分と優秀な頭脳的自分がいる。人には、この２つがある。豹や馬は、遺伝子的自分だけだ。
遺伝子的とは、生き残ることしかコンセプトがないことだ。人間以外の生き物は、すべてこうなっている。もちろん、人のコンセプトにも、生き残ることがある。
しかし、人は、生き残る他に、人として好ましい生き方をコンセプトにしている。優秀な頭脳があるからだ。
人には、優秀な頭脳的人と遺伝子的人の２つのタイプがある。
現在では、わたしは優秀な頭脳だと思ってしまう人が多いと思われる。
「オレはブタと同じではない」と言ってしまう。
見えざる悪魔は、優秀な頭脳にあるので、人は、やっかいなことになる。ブタが、決して指向しない、地球制覇や奇襲などが身体に染み着いてしまう。エクスタシーになって苦しむ。世界戦争などが何度も起って、戦争になるのは仕方がないと諦めてしまう。
ブタにも劣る。
人が優秀な頭脳を与えられる時、すでにして、現在のようなリスクを抱えることがわかっていた。下手をすると、恐竜の後に地球を制覇した人間は、恐竜と同じように、姿を消す可能性を持っている。恐竜も、弾きがねは惑星の衝突であったとしても、長い年月の、恐竜の生き残りの戦いの末の出来事だっただろうから、先の、人と人が世界を２分して殺し合った構図と、何も変わらない。
幸いなことに、広島と長崎にしか使われていない爆弾は、鞘に収まってはいるが、優秀な頭脳は、見えざる悪魔を抱えているから、危ない。
１億年くらいの長期の時間を考えると、人が地球上に存在するかどうか、よくわからない。
恐竜が、もし、身体を大きくしない他の方法で地球の食物連鎖の頂点に立ったならば、恐竜は、仲間を食糧にしなくても良かったかもしれない。
そしたら、仲間を食糧にしなかったら、恐竜は、もっとながく、地球の食物連鎖の頂点でいられたかもしれない。
すべて空想の話しだ。
人も、よく似ている。

人の悲劇は、恐竜とは異なる。
人の悲劇は、明らかに、優秀な頭脳がもらたす。
それは、カミサマが危惧したとおりである。優秀であるがゆえに行き過ぎる。火星などに行く必要などない。地球上のすべての人を何周も殺戮できるほどの武器がどうして必要なのか、わけがわからない。
人は、何をしようとしているのか、わけがわからない。
恐竜と似ているのだ。
地球を制覇したと思ってしまったら、とんでもないことをやってしまう。
人のよろいである。
「オレはブタとは違う」
何も違わない。人は生き物の１種類にすぎない。
たまたま、地球の食物連鎖の頂点にいるにすぎない。人間だけがお墓に入る。他の生き物は、死んだら他の生き物を生かす食糧になる。
それが、食物連鎖というものだ。
恐竜だって、自分のお墓をつくることはなかった。人間は、自分を、生き物だとは思っていないかもしれない。特別に、カミサマから与えられた存在だと思ってしまうかもしれない。
見えざる悪魔のコンセプトは、純粋になることにある。世界のアスリートがロンドンに集まって、競技をする。誰がチャンピオンであるのか、競技をする。
こんなことは、他の生き物が逆立ちしてもできない。飛行機だってつくれない。
人以外の他の生き物は、人のために生を受けていると考えてしまうかもしれない。それほどに、人の優秀な頭脳はすごい。
しかし、よく考えないといけない。人が、お母さんの子宮の中で10カ月を過すことと、豹が、お母さんのお腹の中で過すことに、たいした差はない。何も変わらない。
優秀な頭脳だけが異なるだけだ。
恐竜は、地球を制覇したが、「オレは地球を制覇した」などとイバッテいたわけではない。たまたま、毎日生きていたら、長い年月でそうなった。
人間も地球を制覇したが、人間はやっかいだ。

地球制覇をもくろんだからだ。優秀な頭脳がなかったらできない。
地球を制覇しない限り、捕食される恐怖から逃れることができない。これは、すごい恐怖だ。ガゼルがライオンに追われる恐怖よりも、人が狼に追われる恐怖の方が、大きいだろう。
優秀な頭脳があるから、人は、それをガマンできないだろう。
だから、お墓にまで行き着いた。人は、生き物の中でも特別な存在なのだ。
自分で、そう思ってしまった。大昔は、王しか、自分は特別な存在だと思わなかった。しかし、２０１３年には、多くの人が、人は特別な存在だと思っている。
日本カワウソが絶滅したというニュースも、明日には、別のニュースで頭がいっぱいになる。

●よろい

おかしなことなのだが、人が、「オレ達は特別な存在だ」と思ってしまうのは、人以外の生き物に対してだ。
人は誰も気がつかないが、「オレは特別な存在だ」と思っている限り、日本カワウソのようなことは、次から次に出てくる。
どうにもならないことだが、生き物は、地球上では、かすみを喰って生きるわけではない。他の命をいただかなければならない。これはどうにもならない。地球がある限り、地球上の生き物は、変わらない。重力があるからだ。
重力があって質量があったら、エネルギーがなかったら、存在を保てない。
だから、人が、オレは特別な存在だと思っている限り、地球上の生き物は激減する。あたりまえのことだ。
火星にまで行ってしまう、人の優秀な頭脳は、反面、簡単に、自分達を滅ぼすことができる。
これにブレーキをかけるように、見えざる悪魔は、使命を受けている。
「オレは特別な存在だ」を研ぎさえすれば、危険な優秀な頭脳を滅ぼせると思っているかもしれない。
「オレは特別な存在だ」と思ってしまうのは、見えざる悪魔の作戦であって、人の、他の生き物に対するよろいである。

「オレとお前は違う」
すべての人は、こう思いたがる。豹やブタにはないものだ。
「オレとお前は違う」ということばの中に、「オレの方が優秀だ」ということばが隠されている。優秀にもいろいろある、「わたしの方がキレイな足をしている」というものもある。
人は、人の優秀な頭脳は、この、よろいの概念に覆われてしまう。いいとかワルイではない。そうなってしまう。
あかちゃんには、こんなものはない。豹に、こんな比較の概念などがないことと同じである。
競争の概念がない。
地球の食物連鎖の頂点に立ったものでしかわからないだろう。
２番ではダメなのだ。２番では、１番の生き物に喰われてしまう。そんな恐怖は、なんとしても払拭しないといけない。
槍ができて、鉄砲ができて、やっと１番になった。
この概念は、恐竜のように、戦う相手が、同じ仲間になってしまった。人間は人間を襲ってしまった。
意味がわからない。
恐竜のように、食糧がなかったわけではない。
たった、どっちが優秀であるのかという、くだらない概念で、人間は、人間を襲いはじめた。
もう、それが１万年くらい続いている。
ほんの些細な、人一人が生きることにおいても、この「オレはお前と違う」という概念は、消えることがない。
よろいの概念である。
人が生きるということは、この、よろいの概念と、いかに上手につき合うかにかかっている。
たった算数の試験の結果が50点と53点でも、争う。53点だと、ホットするのだが、隣のよっちゃんには勝ったのだが、まだクラスでは30番だったりして、母親に、励まされる。
これらのすべてがどこから来ているのかは明らかなのだ。それはよろいなのだ。単なるよろいだから、生き物の本質ではない。53点もとれる算数のチカ

ラがあることは、特徴だろうから、特別何もない。人間が優秀であるわけでもない。
ロンドンオリンピックの一般の部が終わって、メダルの選手の凱旋が続いている。
よろいである。
みんな、すごい特徴を備えていて、憧れる。みんなに尊敬してもらえる。
しかし、人間の本質は、別物である。
オリンピックのメダルは、単に、その人の特徴に過ぎない。国別メダルランキングなどもある。
単に、その国の特徴を表わしているに過ぎない。もし、メダルが少なくて恥だと思ってしまうのだったら、それはよろいである。国家のよろいである。
それは、広島と長崎で使われた爆弾を、何発所有しているかという、国家のよろいと、なんら変わらない。
くだらないとは言っていない。
あれは単なる特徴だと言っているだけだ。
そしたら、人の本質は何であるのか。
これが重要だ。

こころ

●人が動くこと

こころは、愛の器である。こころには、愛しか入っていない。
ただ、こころは、見えざる悪魔の、よろいが入っている場所でもある。
次元は異なるのだが、こころに入ると、よろいと愛は、こころをシエアーしてしまう。
愛が１００だったらこころはすべて愛になってしまう。よろいが１００だったら、こころは、すべてよろいになってしまう。
時々ある。メダル欲しさに、やってはいけないことをする。メダルをはく奪される。
こころの中は、よろいが１００近くになっていただろうと予想される。
こころとは、そういうものだ。
人のすべてのこころは、この愛とよろいのシエアー状態で説明ができる。
もちろん、こころは、豹やブタにはない。残念だが、人間だけにしかない。
つまり、こころは、優秀な頭脳にあることになる。
地球上の生き物の本質は、遺伝的生き残ることにある。どんな手段を使ったとしても、自分の子孫を後継させたい。
しかし、人だけに、もう１つの本質がある。
こころである。
こころの中の、よろいと愛のシエアー状態が、人間のもう１つの本質である。
よろいのないあかちゃんを除く、65億人の人のこころのシエアー状態の平均は、よろいが80に愛が20だろう。私の勝手な想像である。
ロンドンオリンピックのメダルは、単なる、その人の特徴にすぎない。メダルが故に、よろいができてしまったら、「オレはお前とは違う」と思ってしまったら、こころのよろいが90になって、愛が10になるかもしれない。
そして、次のオリンピックのために、90のよろいが、よからぬことをやってしまう可能性がある。

オリンピックでメダルを取れるくらいの修行をしているのだから、愛が20ではなくて、30くらいある人が多いだろうと予想する。
よろいのたとえで話してはいけないのだろう。
いままで生きてきた人の中では、ブッダのこころの愛が80くらいではないかと予想する。よろいが20だ。こんな人は、人間の歴史でも、３人しかいない。
あかちゃんが、愛が１００なのに、大人になってしまうと、人間の歴史でも、愛が80の人が３人しかいなくなる。
それほどに、愛は難しい。愛を貫くことは難しい。それほど人間の世界は、よろいにまみれている。いいとかワルイではない。人間のもう１つの本質は、そういうものだ。
人が動くことは、遺伝子の指示によるものと、こころの指示によるものがある。こころには、よろいと愛があるので、実際には、人は、遺伝子の指示で動くことと、見えざる悪魔のよろいの指示で動くことと、愛の指示で動くことの、３つがあることになる。
あかちゃんだけ、もう１つある。
反射というものがある。誰にも教わらないのに、生まれてすぐに、お母さんのおっぱいが飲めるようなことだ。おっぱいを飲むことは、豹でも同じなのだが、舌を蠕動運動させて、お母さんの乳房からの母乳を絞り出す。こんな難しいことを、人間のあかちゃんだけではなくて、豹のあかちゃんだってできる。人間だけではなくて、生き物のチカラはすごい。
反射は、おおむね大きくなったら消えることが多いので、人は、遺伝子の要請で動くか、よろいの要請で動くか、愛の要請で動くことになる。
遺伝子の要請は、眠ってしまったりごはんを食べたり、多くのことがある。よろいも、多くある。競争はよろいだから、遺伝子の要請以外のことは、ほとんどが、よろいの要請によって、人は動いているのではないかと思ってしまう。
そしたら、愛の要請はないのだろうか。

●こころの中のよろい

愛の要請で人が動くことを考える前に、こころの中のよろいを。もう少し考えておきたい。
人間の歴史でも３人しかいなかった、こころの中の愛が80の人であれば、その人が動く時は、愛に指示されて動くことに間違いはないだろう。
しかし、フツウの人は、愛が20くらいしかない。こころの中の愛の割合は20くらいしかない。
動いたことのほとんどは、よろいの要請によるものだ。その確率が高い。
家族でも学校でも会社でもだが、集団はすべて、よろいの構成をしている。
会社は、大昔の侍の組織と似ていて、ボスの命令が通りやすいように、ヒエラルキーになっている。江戸時代でも同じだった。
会社とは、おかしなものだ。
これは、よろいを構成しているに過ぎない。組織がしっかりしていると、会社がしっかりしているかのような錯覚に陥っている。
組織が硬直していて、会社がハンマーで叩くと壊れそうだとは思わない。
だから、こんな、前時代的な組織になっている。
こんな前時代的な会社に、就職すると言う。会社に入ることだ。
よろいの囲いの中に入ることだ。
よく考えないといけない。
会社は、コンクリートと配線でしかない。意味がない。意味があるのは、そこで働いている人である。
いま、半導体の会社や液晶カラーテレビの会社が、少し前まで優良会社だったのに、アッという間に、会社更生法を申請したり、資本参加を要請したりすることになっている。
日本の会社は、多分、多くの会社が、こうなるだろう。
おかしいのだ。
会社そのものが、よろいのカタチをしている。会社が言っていることもよろいである。
世界は、市場経済社会だから、生活者と商品が主役である。会社は主役でもなんでもない。
オレ達は凄いと思っても意味がない。
生活者か商品でない会社が、凄いわけがない。

日本の会社は、みんなよろいを構成しているので、どこも、オレ達はすごいだろうと言っている。ＣＭを見ていて、商品が主役であることを理解していたＣＭから、オレ達は凄いだろうになってくると、もう危ない。
わが藩の誇りであるなどと言いはじめたら、危ない。
会社などどうでもいいのだ。
日本の人は、凄く残念である。
こんなどうでもいい会社なのに、会社が名刺のようになっている。どこどこに勤めていると飲み会で言うと、モテ方が違ったりする。バッカじゃないかと思う。
それほど、会社は、よろいにまみれている。
こんなことがながく続くわけがない。せいぜい、数十年だ。
こんな会社に就職しないといけないのだから、個人は最悪になる。
会社は、このように、織田信長の時代となんら変わらないよろいの構成をしているのだが、国のお役所や地方自治体のお役所でも、あまり変わらない。
学校でも同じである。校長がいて教頭がいる。
こんな、前時代的なよろいにまみれた集団に入らなければ収入を得られないのだから、どうにもならない。
「あなたは１級で入社するけど、給料が上がるのは、級が上がらないとダメだ」
「毎年試験があるからガンバってください」
やっと試験から解放されたと思ったら、またしても、同じ仕組みである。
日本は、もうどうしようもない。
誰も、こんな不思議なことを、正そうとしない。「昔からこうやってきて豊かになった」
豊かになったのは、サンフランシスコの田舎風のおじさんのような人が、昔は、たくさんいたからだ。
必死ですごい商品を開発しないと、明日食うにも困った。
すごい会社がいっぱいできて、豊かになって、求められる人材が一変した。
浜松の田舎風のおじさんではなくて、飛行機や船などを正確に運転できる船長が求められるようになった。会社を正しく運転することだ。
もう遅い。

会社とは、そもそもが、田舎風のサンフランシスコのおじさんが、商品を開発しながら、仕方がないから会社も経営することに意味があった。今でも変わらない。
会社を経営しながら、仕方がないから商品を開発することなどあり得ない。
しかし、２０１２年とか２０１３年には、そのあり得ないことが、フツウである。
もう、会社の社長で、商品のことがわかる人などいない。
世界は市場経済社会だ。生活者と商品が主役である。商品がわからない社長がいたら、そんなにながく会社はもたない。あたりまえのことだ。
こんな日本の現実に暮らしていたら、いくらよろいが薄い人であっても、ガンガンによろいが厚くなってしまう。
学校などは、正確に、豊かになった豪華な船を運転する技を勉強するようにできている。日本には、たくさんの船長が必要だと誰かが考えた。学校は、みんなそうなっている。学校のグレードによって、立派な船の船長やクルーになれるように、よろいが出来上がっている。
サンフランシスコの田舎風のおじさんは、１人で何兆円も稼ぐのだが、日本に求められた人材は、大きな船だから安全に運転しろだった。
誰かが、なにかを勘違いしているし、錯覚している。もう遅い。
日本に、サンフランシスコの田舎風のおじさんのような人は現れない。
今年の級が上がる試験を必死に勉強しているようでは、会社を救うかもしれない、市場経済社会の主役である、新製品を研究したり開発したり、できるわけがない。
「同期なのに、オトコというだけで待遇が異なる」
こんなことを並べたらキリがない。
嫉妬は、よろいのことばだし、競争もよろいのことばだ。試験もよろいのシステムだ。
こんな、よろいまみれの世界に住んでいれば、アッという間に、個人だって、よろいにまみれる。
「パクっても何でもいいから、実績を上げないと明日がない」
大昔、村の狩りの担当で、なかなか鹿が獲れずに、村八分にされたことと、なんら変わらない。

人が集まって暮らすと、すべて、よろいにはまってしまう。

●愛が**50**によろいが**50**の人

どうしてこころの中のよろいが80になってしまうかの話しだ。
あかちゃんの時はゼロだったのに、大人になると80になる。あたりまえである。よろいが80なければ、みんなと一緒に、生きていけない。
サンフランシスコの田舎風のおじさんは、亡くなってしまったが、会ったことがないので、こころを読むことができない。
私の想像では、愛が50によろいが50だったと思う。世界に１０００人とか１万人とかしかいないと思う。
愛が50もあったら、よろいが50だったら、みんなとソリが合わない。
サンフランシスコの田舎風のおじさんは、アメリカにいたから、まだなんとかなった。
日本だったらあり得ない。
日本だったら、ふさわしくないと、誰かが言う。
大統領が隣にいても、どっちが上座であるのかなど、お構いなしの人だろう。べつに大統領がエライとは思わない。もちろん、自分がエライとも思わない。ただ、自分は、そうしたいだけで動いている。
多分、サンフランシスコの田舎風のおじさんは、そんな人だ。
世界が市場経済社会で動いていて、生活者と商品が主役であることを見抜いていて、自分に自信があって、ただそれを実現させたいために、必死で働いたのだろう。
これを実現したら、自分は大統領になれるかもしれないとか、富豪の仲間に入れるかもしれないなどといった、よろいによって動かされることが、少なかっただろう。
今の日本の大きな船の運転を任せられている人達とは、基本的に、人が異なっている。
日本には、ただ、おもしろいという、自分の内側が発するわけのわからないものに動かされて、損得勘定なしに動く人など、少ない。少ないというか、いない。

おもしろいは、人間だけに与えられたチカラだ。あかちゃんの時に、発育の次に発現する。誰でも発現する。
よろいは、それを覆い隠してしまう。
サンフランシスコの田舎風のおじさんや、昔日本にもいた浜松の田舎風のおじさんやおばさんは、こころの中の愛の大きさが大きかったために、自分の中に芽生えた、おもしろいというチカラを、覆い隠さなかっただけだ。
サンフランシスコの田舎風のおじさんや、昔の浜松の田舎風のおじさんの技がすごいのではなくて、よろいを50に抑えて暮らしたことが、すごい。
バカだの変わりものだと言われても、ビクともしなかった。
日本は残念だ。
バカだの変わりものだと言われたら、すぐに修正しないと、生きていかれないと思われている。
学校でも通知表があれば、そう書かれて修正する。お母さんが修正する。会社でも、評価が悪くて、級が上がる試験さえ受けさせてもらえない。何年も人事考課が悪ければ、人間ではないかのような扱いを受ける。
日本には、こんな人が溢れている。
２０１３年の日本では、立派な船を正確に運転する船長や航海士が求められる。
船長は、残念だが生活者がわからない。
豊かになった日本を任せられる人を育てたつもりなのだろうが、全くの空振りだった。
日本は、もう豊かではない。借金ができなくなったら、２０１３年、みんなから１００万円づつくらい拠出してもらわないと、国家の運営さえできなくなっている。増税はそういう意味でしかない。
もともと、立派になった船を運転することが大事だと思ったことが間違っている。
そういうことではない。
こころのよろいが少ない人を、愛の割合の大きい人を育てることが、命題なのだ。
日本であろうが、どこであろうが、人を育てるとは、これ以外に、目指すことがあるとは思えない。

よろいの少ない人は、こころの中の愛の割合の大きい人は、誰に何も言われなくても、サンフランシスコの田舎風のおじさんのような行動をする。
日本は、もう遅い。
残念だが。

●愛の要請で動く

いきなり個人的な話しなのだが、私は、別の書にも書いているように、愛が50によろいが50になれるように、修行中の身である。
ホントは、愛が80になりたいし、１００になりたい。私が動いていることの全ては、愛の要請によるものだと、自信を持って言い切りたい。
次第に、愛が１００の人は、あかちゃんの時にしかあり得ないことがわかってきて、よろいが80の人など、ブッダくらいしかいなくて、人間の歴史上でも、多分３人くらいだと思ってしまうと、自分の目指しているハードルも、引き下げざるを得なくなってしまう。
私のこころの中が、愛が50によろいが50であったら、素晴らしい。
修正した。
私が、愛が50によろいが50と言っているのは理由がある。私なりの理由がある。
私欲よりも周辺欲を優先する天秤が、よろいが50に愛が50だと思っているからだ。
人が人らしく生きる姿の１つは、自分が周辺の幸せを優先して生きているかどうかだ。
人は、なかなか周辺を見ようとしない。どうしても、自分の視点から外界を見てしまう。すると、自分に有利なことを優先して行動をする。
あたりまえのことだ。
何もなければ、人はこうなる。こうなるではわからない。自分の視点から外界を見ることだ。自分の幸せを優先する。
自分の幸せより周辺の幸せを優先する人の行動は、こころの中の愛が50によろいが50近くにならないとできないことだ。それは、私の経験によって判断している。

もちろん、愛が40によろいが60であっても、フツウの人よりは、周辺を優先する行動をする。
私は、その人の行動を見て、その人のこころを読むことがフツウである。
私は、ヒット商品の曳き人なる仕事をすることもある。鼻が高いのだが、許してもらっている。私が、自分を優先するのではなくて、私に、ヒット商品を創ることを手伝ってくれないかと言われた方や会社を優先している限り、うまくいく。
うんと昔の私のようだったらうまくいかない。まだ20代の若者だった私だ。その頃のことは、思い出したくない。赤面する。恥ずかしい。よろいで恥ずかしいのではなくて、その頃の自分のよろいが恥ずかしい。
今は、私は、私を優先して、ヒット商品の曳き人をやることなどない。
しかし、一般的に、自分を抑えて、周辺を優先する人は少ない。もっと自分を抑えれば、見えるモノも見えてくるのにと思ってしまうことが多い。しかし、なかなか、このようなことは、面と向かって言えない。意味のわからないまま、傷ついてしまう人がいる。
なかなか難しい。だからヒット商品など、そんなに簡単には創れない。自分を、奥に抑えてしまわないと、生活者が見えない。一般的に、オレの拓いた技術は凄いだろう。表彰もされたとおっしゃる方の方が多い。それが周辺に何をもたらすかについては、あまり興味がないらしい。
愛の要請で動く人は、少ない。

●考えて動くのはよろいの要請

愛は、人が動く押しボタンで、人は、自分が動いてしまわないと、愛していることを認識できない。
したがって、考えて動いたらよろいの要請によるものだと思って間違いない。
愛の要請にって動いたと言えるのは、動いた結果に考えることだ。
動く時に、あれこれ考えたら、もうよろいの要請が入り込んでいるとみて間違いない。
私は、フツウ、あなたはよくわからないと言われることが多い。

私が、化学屋なのか科学屋なのか経済屋なのかマーケターなのか研究者なのか商品開発者なのか医者なのか保育士なのか経営者なのか、さっぱりわからないだろう。
私は、何かを集中して極めなければ、それなりの人ではないという風潮があるのを知っている。だから、あなたはわけがわからないと言われることは、あまり有利ではないことも知っている。
私は、周辺欲の方が私欲より大きいから、大きくしたいから、あなたはわけがわからないと言われることを気にしない。
そんなことよりも、私の身体が反応するかどうかに興味がある。反応するとは、わたしのこころの中の愛のエリアが動いたかどうかだ。
私は、ほとんど考えないで動いてしまう。
今はそうしている。
一般的に、感性とかカンと言うのだろう。こころの色を大事にしている。
私は、考えて動いて失敗したことが数多くある。会社で働いていたのだから仕方がないと、言訳をしてしまう。仕方がないのではなくて、私が未発達だっただけだ。
「よく考えて動け」
私も、幼い頃、小学生や中学生の頃、何度も言われたものだ。働きはじめても、上司に何度も怒られる。私だけではなくて、日本人の誰もが、耳タコになっている。身体に染み着いている。
大学や働きはじめると、企画書を書かないといけなくなったり、起案書や稟議書なるものがある。よく考えて動けのとおりになっている。
まず目的があって、目標を書くようになっている。
最初は、私は気がつかなかった。
こういうシステムは、見えざる悪魔が、その集団を滅ぼそうとして企画したものだと、気がつかなかった。そういうシステムだと気がつかなかった。だから、本気で考えて書いた。
よくよく考えてみると、上司の都合が悪くなるようなことは、企画できない。自分の属する集団に不利なことは企画できない。
お客さんとか生活者とかの視点などない。
こんなことを本気でみんなでやっているのだから、次第に、どうでもいいこ

としかやらなくなる。あたりまえのことだ。
私は、今だから言えるが、裏表の企画書を持っていた。
企画書や起案書や稟議書を、動く前に書かないといけないシステムになっているのだが、まず、こころの中の、よろいが書いていると考えて間違いない。
愛は損得勘定がないが、よろいは、損得勘定で動いている。
私は、ヒット商品の曳き人だから、過去に、大きな利益をもたらすようなことを曳いたこともある。何度かある。
しかし、私個人の利益になったことは１度もない。
「あんたはバカだ」
何度も、いろんな人からこう言われていた。
私は、私が愛していた会社の利益を大きくしたかった。これは、愛なのだ。
今は、過去形で書けることもあるから、はっきりわかる。
これでいい。私のコンセプトは、挑戦とクリエイティブである。私の心棒に沿っていることの方が重要である。私は、質素に暮らせる。
私は、ここのところずっと、起案書や企画書などを書いたことがない。しかし、多くの企画をしている。今でもやり続けている。ピッチも速い。
私のヒット商品の曳き人だけのことを言ったら、私のやり方は、もう変わらないと思う。
三方一両得になることしかやらない。
三方とは、お客さんである生活者が１方で、商品が２方で、その商品を支えている陰のスタッフが３方である。
２０１３年の日本では、陰のスタッフの２方が、大きく出っ張っているケースが多い。
「こんな技術を開発したのですが」
こういう相談が多い。私は、ヒット商品の曳き人だから、信じてくれている人もいて、相談されることもある。
「お客さんの得になることは何ですか？」
私が、こういう質問をしないといけなくなる。話しを聞いていても、お客さんの得が出てこないからだ。
日本は難しいと思ってしまう。経済的に日本は難しいこともあるが、よろい

に溢れている日本は難しいと思ってしまう。
日本は、どこからかこうなってしまったのだと思う。こうなったではわからない。
豊かになって変わった。
豊かさにふさわしくすることが、すべてにわたって求められた。
日本の豊かさにふさわしい行動マニアルがたくさんできた。企業の行儀は良くなった。コンプライアンスが大事だ。すべてのことは、日本の豊かさにふさわしくである。
戦争で負けて何もなかった時は、こんな余裕はなかった、明日食べることに困った。
豊かであることは素晴らしい。人間らしく生きられる。
しかしよく考えないといけない。
ふさわしくはよろいであることを考えないといけない。よろいは、見えざる悪魔が姿を変えたものだ。
つまり、この豊かさにふさわしくを追ったら、滅びることを意味している。
栄えた社会が継続したことはない。一度もない。みんな滅びて観光資源と文化を残すのみだ。
みんな例外がない。豊かさにふさわしさを追って滅びる。
日本も、凄い勢いで転げている。しかし、まだ豊かさにふさわしさを追っている。
「さすが日本です、震災があっても跳ね返す」
日本の人全員が、このコメントを歓迎する。
これはよろいなのだ。
ふさわしくなんかいらない。跳ね返してなんかいない。もっと、こころの愛の言っていることに耳を傾けないといけない。
豊かさにふさわしいを追って、１０００兆円も借財がある。どこかで、中国に国債を買ってもらうお願いに行かないといけない。確実にそうなる。
それなのに、飛行場がいくつもできてしまう不思議さを、疑問に持つどころか、壊す人さえ出ない。
50年後の私たちの子孫は、海際に、決まって大きな建物があることを不思議に思うだろう。廃墟なのだ。こんな廃墟をつくったら、いくらなんでも、借

財が膨らんで、中国に頭を下げないといけなくなるだろうと、誰でもが思ってしまう。私たちの子孫のみんなだ。
フランスの英雄だって、中国の皇帝だって、エジプトの王だって、やったことは、同じである。
この繁栄にふさわしくだ。
日本だって、一応、繁栄した。もう過去形だが繁栄した。そしてやったことも同じである。繁栄にふさわしくである。そして借財を重ねて滅びる。
人間は哀しい。みんな同じことをする。よろいを大事にする。
人間は、フツウの人間は、フツウの人間のこころは、愛が20によろいが80になってしまう。よろいは見えざる悪魔だから、滅びるに決まっている。
フツウの人のこころは、滅びるようになっている。

愛を大きく

●もともと人の愛は１００

こころの話しをはじめると、おもしろいので、延々とこころの話しになってしまう。仕方がない。こころの話しは、よろいと愛の話しになるから、どっちも長引く。

愛の話しに集中しないといけない。

愛を大きくするにはどうしたらよいかの話しだ。またまずいことに、よろいの話しになってしまいそうだ。

なぜかというと、もともと人の愛は１００だからだ。あかちゃんは、愛が１００なのだが、それは、よろいがゼロだから愛が１００になっているに過ぎない。

「あんた隣のよっちゃんもう歩いてるけど」

まだ言葉もよくわからないのに、12ヶ月になったばかりなのに、母親に、こんな言われ方をされてしまう。

どうして隣のよっちゃんより先に歩きはじめないといけないのか、ゼンゼンわからない。

あかちゃんは豹と同じである。豹は、兄弟であっても、どっちが速いか、競争などしない。

いつかは走れるのだから、それでいいと思っているフシがある。

人間は、おかしなものだ。いずれ歩きはじめるのに、隣のよっちゃんより早く歩きはじめて欲しい。

これはなんなんだ。

さすがに、12ヶ月といえども、毎度毎度言われてしまうと意識する。

「みわちゃんかわいいね～お母さんが美人だからね」

いかにも自分がかわいくないような言い方を、隣のおばさんにされて驚く。

よろいは、学習である。よろいはゼロだった。愛は１００だったのに、よろいは学習されてしまう。よろいは、次第に３とか12とかに増えていく。そして、私が平均だと言っている80にまで達してしまう。

またよろいの話しになっている。
愛がどうしたら大きくなるかの話しなのだが、よろいがどうして大きくなってしまうかの話しになる。
しばらく、よろいの学習の話しだ。
先に結論である。
もし、愛がもっと大きな人になりたければ、あかちゃんに返ればよいことになる。
私は、たまたまだが、３年間、思ってもみなかった保育園の園長をやった。
もし、３年間保育園の園長をやらなかったら、「オレは愛が50でよろいが50の人を目指す」などといった、愛の大きい人が、人間として好ましいような言い方などしなかった。
人間が豹とどこが異なるのかを、ホントのところを理解しなかっただろう。
私は、３年間、子どもたちと暮らして、発見した。子ども達に愛を教わった。子ども達が、私の愛のお手本だった。愛は、学習するものではない。人に備わっているものだ。全員同じである。だから、私が子ども達から教わったことは、よろいを小さくすることだ。
すでにしてこころの中のよろいが80であっただろう私のよろいを、少しでも小さくしないと、私の愛は、現れないことになる。
私は、保育園の園長を、子ども達のために始めたのかどうかよくわからない。「よくやった」と言われたかったのかもしれない。もう自分でわからない。
しかし、はじめた時のことはわからないが、少し経った時のことはわかる。
私は、保育園の子ども達全員を、愛していた。『まゆ』を読んでいただきたい。
私は、保育園から電話があって、その度に、何があっても走って保育園に向かったことを、子ども達への愛以外にないと思っている。
私は、研究者でも商品開発者でもあったし、ハンコを押す人でもあった。
みんな、私が何を優先させているか、よく知っていた。文句は言われなかったが、私は、朝の７時から22時まで、毎日休まず働いた。
私のこころの中の愛は、今だから言えるが、40くらいのまで増えたと思う。
よろいが60だ。

もちろん、３年間だけだったので、私の子ども達との生活は、そこで終わった。
私は、賢くなった。保育園の園長をやった時より賢くなった。
当時、私は、自分を大きく変えたので、大人のよろいが80の世界でトラブルことが頻繁だった。
「ダメなことを正しいと押し通すことがお前の役割だ」
こんなことを平気で言っていたかもしれないのに、「ダメなものはダメだから」と、軽く言ってしまうようになった。
何年も経って、私は、賢くなった。
「これを通すと３方に何もプラスをもたらさない」
こんな大人の言い方ができるようになっている。直接、よろいが80の世界とぶつからない。
集団にもよろいがある。集団にも見えざる悪魔がいてよろいがある。よろいがあれば、コンセプトがある。
その集団の風土がある。
だいたい、よろいが80の風土だ。
「私は愛が50によろいが50の人を目指している」
しかし、普段は、こんなことは、口が裂けても発言しない。何を言っているのか、誰もわからない。
私のヒット商品の曳き人のケースでも、私が賢くなったやり方が、頻繁に出てくる。
三方一両得の話しだ。
お客さんが１方で商品が２方で商品の陰のスタッフが３方だ。
一般的に、商品の陰のスタッフである会社の利益のために、陰のスタッフの成績のために、ヒット商品を曳くことを頼まれる。
「これを押し通すと、三方に何もプラスにならない」
こんな説明をする。
お客さんに何もプラスにならないという意味は、売れないと、一般的には言う。
私に、少しは、ヒット商品の曳き人としての信頼がなければ、こんなやり方は難しい。

自分の我を通すものではないと、暗に言っている。商品は、三方がみんな得にならない限り成功しないと、暗に言ってしまう。
保育園で、よろいを脱いで愛が表に出てきた頃は、ぶつかった。
私は賢くなっている。
三方一両得は、私が、よろいが80の世界と協業するために考え出したことなのだが、私は、本気でそう思っている。
お客さんと商品と商品を支える陰のスタッフの、みんなが得にならなかったら、商品は成功しない。アキバの娘達は、その典型である。

●ぶつかりを避ける

愛は、もともと１００だから、愛を大きくすることなどできない。
しかし、１００もある愛は、ほとんど、よろいに隠されてしまう。あのブッダでさえ、私は、よろいが20あると思っている。愛が80だ。人間として素晴らしい。
しかし、愛が80もあると、人間世界のフツウであるよろいが80の世界とぶつかってしまう。
ぶつかっても、愛が80を貫き通した人が、歴史上３人しかいないと私は思ってしまう。
私は、そこまではできない。
私は、愛が50によろいが50だったら、それが私の最高だと思っているし、目指している。
愛が50でさえも、よろいが80の世界とぶつかってしまう。フツウの生活でもぶつかる。
だから、私は、いろいろ考えて賢くなった。
私は、保育園の園長をやる前と後では、全く違う人間である。単に、こころの中の愛の割合が、20から40になったに過ぎない。時々私は、愛が１００を目指していると書いてしまうことがある。少し鼻が高い気分だと、こう書いてしまう。良くない。
愛を大きくするのはいいが、愛を５でも大きくすると、愛が20によろいが80のフツウの人間世界とぶつかる。

私の経験だと、このぶつかりをガマンできない。耐えられない。愛ではメシは食えないなどと言われる。特に女性は、タダでさえ愛の割合が大きい。
きっと、愛ではメシが食えないと１度は言われている。
「食うか食われるかの世界なのになんだ！」
だいたい、愛に割合の大きい人は権力者ではない。失意に陥ることが多い。
意を決して戦ってみても、簡単に勝負は決する。
愛を大きくすることは、もっと人間らしく生きることだ。あかちゃんを見ればわかる。
しかし、この世は、よろいの世界である。マーケティングのことばをみてもわかる。戦略と言う。勝つか負けるかだ。愛など無縁の世界である。こんなところで愛の割合を上げることはリスクを伴う。
私は意を決しているからいいのだが、意を決することができないと挫折する。愛を大きくするのはいいのだが、意を決しないと難しくなる。
私は、牢に入ることが多かった。何度も個室の牢に入った。
「ダメでもグッドにするのがお前の役割だ」
私は、そういうことは、もう20年くらいやったことがない。だから、誰も私に、「ダメでもグッドにするのがお前の役割だ」と言わない。
知恵が必要である。
そもそも、よろいが厚いと滅びるということを知っていれば、知恵もまわる。
キチンと、三方の１つであるお客さんである生活者の本音を知ることだ。これが大事である。
おかしなもので、フツウ人は、仕事場では、よろいが80で愛が20なのに、生活者になると、よろいが75に愛が25くらいになる。
これをわかっていなければならない。
会社人間と生活者人間は違うのだ。同じ人なのに、あたかも違う人のようになってしまう。
だから、生活者の声をキチンと反映させれば、仕事においては、知恵を発揮することができる。
こんな知恵を使って、できるだけぶつからないようにすることが好ましい。
フツウは、権力者は、よろいが80くらいある。簡単に、ゴメンナサイも言わ

ないで、牢に入れることができる。
権力とは、そういうものだ。実は、これがすごい勘違いなのだが、かえって滅びの構図なのだが、そんなことを深く考える人はいない。
そんなことよりも、愛などというものは心地よいのだが、国際競争力を失ってしまう方向にあるなどといった、わけのわからない議論に巻き込まれてしまう。
会社であったら、今年の販売目標を達成するのに、１・３４％足りない。どんな手段を使っても達成しないといけない。たとえそれが非情なことであったとして、それがビジネスというもので、みんなよく承知している。
愛を大きくするということは、非情に販売目標を追わないという印象にとらわれてしまう。
「あいつは情けない」
「頼りにならない」
これは、常識のウソなのだが、ビジネスの常識であることには変わりはない。
ここで横道にそれたくはないのだが、アキバの娘達を、愛が大きくないと判断することは難しいし、ビジネスとして成功していないと見ることも難しい。
ビジネスに愛はいらないということは、常識のウソである。ビジネスの仕組みが、愛の仕組みとは異なることは仕方がない。そのことと、愛が大きいことは、ホントは関係がない。
愛を大きくすることに躊躇するのだが、挫折することが多いのだが、ホントは、常識の方がおかしいと言っている。
うまくいく例は少ないが、ある。愛が大きくなっても日本の社会のよろいが80で愛が20の中でもやっていける例だ。
しかし、うまくいっていることは少ない。
ぶつからないように知恵を使わないと挫折する。

●逃げることはできない

よく考えないといけない。

もともと、人には、１００の愛が備わっている。こころに１００の愛がある。あかちゃんのこころだけは、愛が１００のままである。
あかちゃんが、そのまま大きくなることはない。運動会だって、１番とか２番というものがある。愛には、そんなものはない。豹が、オレが１番だと言うことはない。走ることの１番だ。
オスとしての魅力は、オレが１番だと言う。それは遺伝子の要請によって言うものだ。遺伝子には、足が速いとかのニーズがない。足が速いも含めて、オスとして魅力が多ければよい。オスは強ければよい。
メスは、いかにも、子どもをたくさん産めそうだったらよい。豹には、セックスが楽しいといった感覚はない。あくまで、遺伝子の要請によるものだ。
人は、豹と同じ遺伝子の要請はあるのだが、それとは、全く異なる、優秀な頭脳の要請というものがある。
それが、運動会の１番２番をやってしまう。
愛が１００であったあかちゃんも、どうにもならない。スタートの時に、半歩前に出ていようと思ってしまう。
幼稚園の子どもが、こんな判断をしても、どうにもならない。よろいの学習をした結果なのだから、どうにもならない。幼稚園の時点で、もうあかちゃんには戻れない。
オリンピックでメダルを獲得することを強いて、達成して銀座でパレードをやる大人を見ていて、幼稚園の運動会で半歩足を早く出そうとする子どもを、簡単には叱れない。ルールを守ることでの叱り方しかできない。
ホントは、そういうことではない。
争を強いて優秀な頭脳を動かしてしまう、見えざる悪魔の、よろいの作戦が、競争である。
こんなすごい作戦を、止めることなど難しい。
２番の経済大国だったのに３番になってしまったら、みんなガッカリする。
競争の概念とはすごいものだ。
本来、競争の概念は、見えざる悪魔の持っているものではない。よろいが持っているものではなくて、人の優秀な頭脳に備わっていて、発育の後に、誰でもに発現するものだ。おもしろいという概念である。
もし、人に、このおもしろいという概念が備わらなかったならば、人は、優

秀な頭脳を。優秀にできなかっただろう。地球での食物連鎖の頂点に立てなかっただろう。
生き残るという遺伝子の要請だけでは、地球のチャンピオンになることは難しい。
幼稚園児にして、運動会で、よろいのために、半歩フライングする気持ちを、抑えることができなくなる。これがフツウである。
地球の食物連鎖の頂点に立っている人間の世界である。人間に、食物連鎖のためだけに生かされているかのような生き物も多くなっているのだ。
人間の優秀な頭脳の先行きは危ない。誰が考えても、「オレに不可能はない」と宣言してしまう、人の優秀な頭脳の先行きを疑う。地球でさえ、自分の下部のように扱ってしまうかもしれない。人間の優秀な頭脳は、不遜である。昔から不遜だった。これからも、「どうだ～すごいだろう」と言いたがる。
これを滅ぼすために派遣された見えざる悪魔も、人間も人間社会も、みんな滅ぼすから、成功してはいるのだが、人の優秀な頭脳の優秀のスピードが、更に速くなっている。
人が１００年以上は生きられないことは、地球に生きる限り逆らえないことなのだが、たった１００年の間に、とんでもないことをする優秀な頭脳が現れる可能性がある。いかに見えざる悪魔が完璧に滅ぼしても、難しいかもしれない。時間的に、間に合わないかもしれない。
残るは愛しかない。
もう、逃げることはできない。
もっと大局的に考えるならば、逃げることはできない。
ほんの70年前くらいの話しだ。個人的には、個人的な愛は、目覚めていたのかもしれないが、たくさんの愛の物語のようなものがあったのだろうが、集団の中で、愛を発揮することはなかった。世界を２分して、どっちが優秀かを争ったのだが、殺し合いになった。
もっと以前は、織田信長達は、領地を争った。人の命より領地の方が価値があった。もちろん、民の人の命だ。
あんまり変わらないまま、規模が、美濃といった世界の、ほんの地方の話しではなくて、太平洋といった、デカイ話しになった。

ここでも領地を争ったのかもしれないが、それよりも、どっちが優秀かを争ったのだろう。
いまとなっては、よく意味がわからない。
個人的な愛は目覚めていたのかもしれないが、集団で愛を発揮できなかった。
愛は、人が動く押しボタンだ。戦争は、よろいの戦いだから、戦争に参加することは、よろいのボタンに賛同しているに過ぎない。
見えざる悪魔の純粋になるコンセプトに従っただけだ。
見えざる悪魔の純粋になるコンセプトに従っている限り、集団から襲われることはない。
見えざる悪魔の優等生だ。
また同じようなことが持ち上がったとしても、後々、あれは何だったのか、生き残ったとしても、自分で説明できないとしても、大部分の人が、戦争の見えざる悪魔に従ってしまう。
これは、いいとかワルイではない。
人のこころが、80％よろいに覆われていて、20％しか愛がないことが、フツウだからだ。自分の属している集団が、よろいの行動の典型である戦争に突入しても、自分のこころの80％は、よろいなのだから、集団の意思に従うことになる。
織田信長の時代と違って、地球が狭くなっていることを知っている人が多くなったために、個人のこころの愛の20％であっても、「私は反対だ」と言ってしまう人が、増えた。70年前の世界を２分して戦った戦争であっても、「私は反対だ」と言ったした人がいた。織田信長の時代には、その場で切り捨てられただろう。
そういう意味では、人のこころの20％の愛は、表現力を増してはいるが、依然として、よろいが80に愛が20であることに、変わりはないだろう。
したがって、たった２時間で世界を１周する人が現れているのにもかかわらず、集団がよろいの典型である戦争の気運になったら、「オレもそうだ」と言ってしまうと思われる。
人は哀しい。もっと多くの時間を必要とする。もっと、２時間で地球を一周する人が多くならないと、ほんの３分前の人と、殺し合ってしまう出来事

を、不思議と思わない。
２０１３年だが、もう逃げることはできないだろう。ぶつかりは避けないといけないのだが、小さなぶつかりを避けるしかない。小さな集団のよろいに攻撃をくらって、ぶつかりを避けることくらいは、ガマンしないといけないのだろう。人間が一生を生きるということは、集団とのぶつかり合いの連続だから。
しかし、もっと大きな集団については、もう逃げてはいられないだろう。逃げていたら、ホントに人は滅びる。
もう人は、愛を大きくして生き延びる以外に、方法を失っている。

戦うことになる

●挑戦者

高杉晋作に聞いたことがない。

想像するに、高杉晋作は、愛が35によろいが65くらいだったに違いない。

江戸時代のよろいが80のフツウの人に較べたら、愛が35もあると、悩むことになる。

当然のことだ。

集団の行動が、愛に逆らって、よこしまな、権力志向に陥ってしまうことが多いからだ。

「オレが天下を統一する」と言って、カミサマに天誅を下されるまで、ガンバル人が多かったのだ。

それが、カッコいい時代である。

こんな人がリーダーであることが多い藩だから、少し世界が見えると、「なんとバカなことを」と言ってしまう。

２０１３年に２時間で地球を１周する人が、「なんとバカなことを」と言ってしまうことと、何も変わらない。

騎兵隊などといった、集団の悪魔に逆らうような行動をしてしまう。高杉晋作の話しだ。

もっと大きな世界が見える人に、愛が35くらいの人が多い。

だからどうするのか。

戦うか観客席に座るか。選択は２つしかない。

坂本龍馬も、高杉晋作と同じような行動をとった。思考が似ている。こころの愛の大きさが同じなのだろう。こころの、愛の大きさが35くらいだった。よろいの大きさが65くらいだ。

大きさの数字は問題ではない。当時のフツウの人とは較べものにならないくらいに、こころの愛の大きさが大きかった。

フツウは、藩の事情や家族の事情で、愛などを消し去ってしまうのだが、たまに、おかしな人が現れる。

集団が決めて走っている行動に逆らうことになるので、狙われる。
集団が走っている行動は、愛の行動になることは、１００％ない。それが、人間の集団行動の難しいところだ。
だから、集団は、例外なく滅びる。
近年になって、国家が、なかなか滅びなくなってきたのは、国家のリーダーを投票で選ぶことになったからだ。
織田信長が聞いたら怒る。
とても理解できないだろう。
見えざる悪魔が、織田信長を陥れることは簡単である。織田信長の天下を終わらせることも簡単である。
しかし、みんなが投票してリーダーを選んでしまうと、そのリーダーが、権力のよろいなどにまみれて、リーダーにふさわしくなくなるまでに時間がかかってしまう。４年という年月は、絶好だったのかもしれない。
リーダーが替わることになったために、リーダーが滅ぶと国家が滅ぶという常識が壊れてしまった。これからは、なかなか、国家は、簡単には滅びにくい。
しかし、確実に国家は滅びる。見えざる悪魔は、たとえ１０００年であってもやる。やるとは、国家の崩壊である。
人間の集団的行動は、よろい的行動に陥ってしまうことが１００％である。
このことが、哀しいけど、どうにもならないことだ。
人は知恵を絞って、選挙なる方法を編み出したのだが、そもそも、権力を、生活者が奪い取ったことがすごいことだ。
生活者は、そもそもの人間の集団生活のはじまりの人だから、よろいにまみれることが、少ない。少ないだけだが。
そもそも、狼からあかちゃんを守りたくて、仲間が集まって協力して、狼用の武器を工夫した。
それを、人に向けることはないと思うのだが、人は哀しい。人のよろいが哀しい。
生活者は、人の集団行動の原点だから、選挙をやったり、工夫をする。その工夫のほとんどのことは、リーダーがよろいにまみれることを防ぐ工夫であり、集団行動が、よろいにまみれてしまうことを防ぐ工夫である。

生活者が、たとえ、こころの愛が20であっても、20の愛の表現をしたくなるのは、当然のことだ。権力が生活者にあるのだから、あたりまえのことだ。
しかし、生活者は、権力を得て、まだ日が浅い。地球上のどこの地方でも、生活者が権力を得て、まだ少ししか時間が経過していない。
現在の世界は、事実上、陰のリーダーやスタッフ達がいなかったら、動かない。ホントは、権力者である生活者に雇われているスタッフなのだが、長い年月、彼らは、個人の権力者のスタッフだったので、君主的志向をする。君主と民的思考である。これが、なかなか、世界で壊れない。
日本でも壊れない。
まだ多くの年月を必要とする。
しかし、日本の生活者の総意は、気がついている。
「ダメなものは壊してしまわないとダメなんじゃないの？」
「あなたに壊せるの？」
「そんで新しいものを創れるの？」
２００９年ごろから、日本の生活者の総意は、こんな選択をはじめた。
ウソでもいいいから、「オレに任せてくれ」と言わないと、選挙で投票してもらえない。
高杉晋作の時代には、生活者などいなかった。民がいただけだが、民は、命すら価値が小さかった。２０１３年とは、すごい違いである。
高杉晋作は、自分の愛の大きさに従おうとすると、藩の見えざる悪魔や日本の見えざる悪魔と戦わないといけなくなった。戦うと破れて殺されるのだが、それを承知しても戦う。坂本龍馬も、全く同じ選択をした。
自分の愛に従ったのだ。
人間の歴史には、そういう無謀な人が、けっこう現れる。挑戦者と言われる人だ。
高杉晋作のような人だ。必ず、殺られることも例外ではない。あたりまえのことだ。集団の見えざる悪魔に戦いを挑むのだから、生き残ることは難しい。
挑戦者たちは、みんな、自分の愛の大きさに悩む。簡単には、集団の見えざる悪魔に従えないのだ。集団の見えざる悪魔には愛がない。集団の見えざる

悪魔は、すべてよろい的行動になってしまう。集団のよろい的行動を抑えているのは、法律や社会からの監視に過ぎない。
過ぎないという言い方はおかしい。愛がないという意味だ。抑えがない。ブレーキがない。
したがって、もし挑戦者が現れなかったならば、集団が滅びるまでに、そんなに時間はかからない。
挑戦者は、集団を崩壊させようとする集団の見えざる悪魔に戦いを挑む。
なぜ命がなくなることを天秤の反対に置いて、得が何もないこをやるのか、誰も理解ができない。それは、自分のこころの愛の大きさが大きいことを恨むしかない。高杉晋作も坂本龍馬も、よくわかっていた。
そういう生き方の人がいるのだ。
２０１３年においては、集団は会社に代表される。日本にも、ものすごくたくさんの会社がある。
集団には、愛がないので、ほっておいたら、見えざる悪魔の天下になってしまう。ほっておいたら、見えざる悪魔の崩壊のシナリオに晒される。ほんの３か月前には優良企業であったのに、３ヶ月後には、株価が１／10になったりする。
もし会社に挑戦者がいないならば、会社は次々に滅んでいくことになる。
あたりまえのことだ。
日本という国家集団も地方自治集団も、そして多くの会社集団も、多分、世界の歴史的滅びのパターンにすでに入っている。
不思議なことに、滅びのパターンなのに、もがいてはいない。
理由は、借金ができるからだ。お父さんが個人的なお金持なのだ。息子達が集まって国家や地方自治や会社を運営しているのだが、人間の歴史的な滅びのパターンのように、豊かになって、豊かさを追うことがあたりまえになって、収入がなくなったのに、豊かを追いたがる症候群に陥っている。
人間の歴史は、すべて同じパターンなのだ。ものすごい栄華を極めていても、今は、もう土に埋もれていて、発掘しないといけない状態ばかりである。
人間は、何も変わらない。豊かになったらすぐに終わりがくる。
日本も典型的な、豊かを体験した人達が住んでいる。

収入が半分になっても、お金の使い方を半分にしない。お父さんのお金を使い果たすまでは、借金をしても豊かな生活を追う。
当然のことだが、いつか、お父さんの財産は底をつく。大昔は、王の財が底をついた。今は、日本の生活者の財が底をつく。これから、劇的に、生活者の財を国家や地方自治の財に移すからだ。これを増税と言う。
何年か先には、日本の生活者の財産は先細りになって、お父さんの財産とは言えなくなってしまう。
そしたら、世界にゴメンナサイをするしかなくなる。昔は、世界にゴメンナサイなどしなかった。勝手に滅びた。都に人がいなくなってしまう。汐が引くように人がいなくなる。都には食べるものさえなくなる。
昔は、それから１００年経って、隣に、また新しい街ができたりすることが、日常だった。
みんなよく知っていた。豊かになったら滅びることを知っていた。そして、滅びたら、豊かな街へ移った。
２０１３年の日本では、あたかも日本は滅びないと信じられているかのような様相である。
２０１３年の国家予算を要求ベースで積み上げたら１００兆円になる。
このままでは、劇的な日を迎えてしまう。追い込まれてしまう。
劇的な日とは、１００兆の予算請求から50兆を削ることを、世界の日本の国債を、仕方なく買う国から要求されることだ。要求ではない。脅迫されることだ。もともと、この場合は、脅迫される方に非があるのだから、なんと言われてもどうにもならない。
それでも、成長戦略を並べたりして、できもしない話しをするのだが、誰も信用はしない。
問答無用という言葉は日本のことばかもしれないが、日本に向けられる。
すごく残念である。
１００兆も予算要求があることは、誰でもが知っている。30兆削ったら政権政党支持率が20％は落ちるだろう。
これから先が、こころの問題である。
よろいが80だったら、なんとか先に延ばしたいだろう。借金を続けられる方策を検討する。成長すればいいのだから成長戦略を描く。

こころの愛が35もあれば、どうやってもダメだから、１００兆の予算要求を40兆カットして60兆で実行して、人気がなくなれば、辞めればよいと考える。
こういう人を挑戦者と言う。
豊かになって豊かを継続したがる人の習性に矢を射なければ、その集団は滅んでしまうことは、歴史を見ればわかる。
自分がかわいければできない。
２０１３年の日本の局面のような時に、こんな人が現れた試しがないことが、人間の歴史である。だから国家という集団は、豊かになったら滅びてきた。
これは、会社集団でも全く変わらない。
ボーナスを年間10カ月も支給していたのに、10年後には、会社更生法のお世話になる会社だってある。
人間がやっているのだから、何も変わらない。
豊かであることがよろいであることに、誰も気がつかない。

●フツウは戦わないかもしれない

こころの愛が20以上ある人は、挑戦者になるかもしれない話しだ。
こころの中の愛が20以下だったら、その人が挑戦者をやる可能性は少ないだろう。
こころの中のよろいが80もあるということは、価値観が、表面的なことに偏るという意味でもある。早く課長になって他者に指示したいのだ。報酬も多くなる。名刺を配りたくなることがなによりだ。うれしい。
こんなことはよろいだから、愛の大きい人は、喜びが大きいわけではない。
日常の生活では、こんなことがフツウに起っているのだから、こころの愛を大きくするニーズなど出ない。
人が、学校にいたり会社などにお勤めをしていると、こころの愛を大きくすることを奨励されたりしないから、こころの中の愛が大きくなることはない。
人間のこころで愛が１００であるのは、あかちゃんだけだ。紆余曲折があっ

たとしても、晩年に、よろいが80にまで修行できた人は、ブッダの他に、２人しかいないだろう。
愛を大きくすることは、それほど難しい。
学校などでは、一見、愛が大きくなることを教えているかのような印象がある。特に小学校低学年などでは、そういう印象である。
多分ゼンゼン違う。
日本で教育を受ける人は、日本が世界と戦っていける戦士になることを求められる。
事実上の話しだ。
経済的な戦士であったり、スポーツの戦士であったりだ。とにかく、日本が世界と戦うための人を育てることだ。
戦士に愛など関係がないから、こころの愛が大きくなることなど考えられない。
原発立国になろうと思ったら、他国の原発技術と戦わないといけない。
もし事故があったら、人間を滅ぼすかもしれないなどということは、思考に封印をしないとダメだ。
もう１度愛の役割を整理する。
人間の頭脳は、ほっておいたら、自らを壊すことまで考えてしまうことは確実だから、そのブレーキとして、見えざる悪魔を与えて、自らを滅ぼすようなモノを開発しても、壊して消してしまおうとしたことと、全く別の角度から、愛を与えて、優秀な頭脳をコントロールしようとしたことからはじまった。
愛が、優秀な頭脳をコントロールできなかったら、その役割を果たせない。
案の定、優秀な頭脳は、いくつかのパンドラの箱を開けてしまった。これからも、新しい箱を開けて行くだろう。たった１回の事故であっても、人が滅んでしまうことになりかねない。同じ地球を支配した恐竜の絶滅を、他人事のようには語れない。同じことをやっている。
愛とは、こういうものだ。優秀な頭脳をコントロールするものだ。幸いなことに、人には、愛には、無条件に反応して動いてしまうチカラが与えられている。
すべての人が、この愛のチカラを信じてしまえば、地球における人の存在

は、脅かされない。
しかし、それは難しい。
人のこころの80％はよろいなのだ。
２０１３年においても、人の優秀な頭脳にブレーキをかけるのは、見えざる悪魔なのだ。愛は、ひ弱い。それが現実である。
愛には、正直なところ、優秀な頭脳のブレーキ役を果たす前に、同じブレーキなのに、見えざる悪魔と戦わないといけないのだ。
明治維新などは、江戸幕府の見えざる悪魔と、日本を愛する高杉晋作や坂本龍馬などの若者の愛との戦いになった。
江戸幕府はもう滅びる直前だったから、維新の若者が生き延びたことで、終わってしまった。黒船が弾きがねだった。
維新の若者は、みんな、江戸幕府の見えざる悪魔に襲われて死んでしまった。
生き残った人が、明治政府をつくった。
このように、愛は、見えざる悪魔とも戦わないといけない。
シンドイ。
日本の小学校低学年の教室が、愛を大きくする行動をするかどうかの話しだ。
あり得ないことだ。
日本の総意が、「私たちは、世界のみんなが幸せになってくれるように行動することにある」と、コマーシャル的よろいの表現ではなくて、本気で、心底思ってしまわないと、小学校低学年の教室で、子ども達のこころの愛が大きくなるような行動はしない。
つまり、ブッダに近くなることだ。自分が幸せだということは、あなたが幸せになったからだと思えることだ。
あかちゃんでは、お母さんとの関係は、こうだ。お母さんが幸せだったら、自分が幸せなのだ。よこしまなことなどしない。最近のお母さんの30％くらいは、あかちゃんのこんなブッダのようなこころ根を切り裂く。「あんたも大事だけどわたしも生きている」と言ってしまう。そしたら虐待に進む。
どう考えても、小学校低学年だけではなくて、学校では、よろいは厚くなる方向だと、思わざるを得ない。

お母さんは、教育さえなかったら、あかちゃんのように、愛が一時的にあかちゃんとの関係だけは、１００になる。豹はそうする。生き物は、そうなっている。
教育ってなんだ。愛を大きくする場所なのか、よろいを大きくする場所なのか。
他者が１人の人に、教え育むという考えそのものが、為政者の考えに基づいているのだから、教育を議論することは、愛にはそぐわない。
愛に、為政者など関係ない。
織田信長が学校をつくったであろう。
どういう学校になったか、だいたい想像はつく。
日本中に同じような学校があった。
世界でも同じである。
よく考えないといけない。
為政者は、権力の拡大や表現に興味がある。
これは、すべてよろいだから、学校というのは、そもそも、よろいを学習する機関だと言える。大昔から、学校は、こうなっている。
あたりまえのことだ。
どうして、愛が大きくなることに戦いを挑まないかの話しをしている。
どうして挑戦者なる人が、世界でも少ないかの話しをしている。
愛のためには、誰も戦わないかもしれない話しをしている。
高杉晋作は、日本を愛するあまり、江戸幕府と戦うことになってしまった。
こんな人は、簡単には現れない。自分の愛が、裏切れないほどに大きくないと、戦えない。戦ったら、負けるのだから。

●小さな挑戦者
フツウの人は、愛を大きくすることを奨励されないから、結果的に、人のこころの愛は大きくならない。多分、紀元前から、人のこころの愛の割合は20でよろいは80だっただろう。
何も変わらない。人のこころが何も変わらなければ、依然として、人の優秀な頭脳のブレーキ役は、見えざる悪魔になってしまう。

見えざる悪魔の目指すものは崩壊だから、戦争を引き起こしてしまう。
人はずっと戦争をしてきた。見えざる悪魔の意図どおりである。戦争とは、おかしな言葉だ。人の世界の言葉のほとんどは、見えざる悪魔の言葉だ。よろいの言葉である。
ランキングなんかもそうだ。豹は、ランキングなんかには興味がない。自分の子孫を、いかに残すかだけを考えて生きている。
愛の言葉など、極めて少ない。
探しても出てこないかもしれない。
もちろん、よろいや愛は、人の行動のことだから、人の行動についてのことばだ。
色や音などの言葉は、状況を伝えることばだから、たくさんある。
人は、愛が、どんどん小さくなる方向で生きるから、フツウは戦わない。高杉晋作のように、自分の愛が大きくなって、戦いへ向かう自分が、よくわからなかったりする。
寝床で考えると、これは愛なのだと気がついたりする。
愛の大きい人は、そうなる。よろいの大きい人は、戦わない。よろいの大きい人のキーワードは、従うだ。優等生だ。
私は、『ソウルの縄文』『ソウルのマナティ』にあるように、挑戦者について、ある種の考えを持っている。
変革者も挑戦者と繋がっている。『喫水ー変革者』『ブルーセダンとの戦いー変革者』を読んでいただきたい。
企業集団を滅ぼすモノは見えざる悪魔であり、崩壊を防ごうとして戦うのは挑戦者だと思っている。もし、企業集団に、挑戦者がいないのであれば、その企業集団は、崩壊してなくなってしまうしかない。
いいとかワルイではない。大昔から、人が集まる集団は、こうなっている。
企業集団だけではなくて、国家も集団だから、国家だって崩壊して滅びる。
崩壊を救えるのは、挑戦者だけだ。自分の愛が大きくて、集団の見えざる悪魔に戦いを挑んでしまうことを、抑えることができない人のことだ。
理由などない。自分に得もない。よろいの大きい人から見ると、さっぱりわからない。
あたりまえである。

愛は、人が動く押しボタンである。人は、愛で動いてしまった自分を説明できない。
私は、小説にして『喫水ー変革者』にしてあるが、このモデルは、私である。かなり主人公と私は異なってはいるのだが、会社のメカニズムについてや、会社には挑戦者が欠かせない話しを、物語にしている。
小さな挑戦者の物語である。
モデルは私だから、私は、小さな挑戦者をやったと思っている。
私は、小説のように、何度も命を狙われてはいない。しかし、集団の見えざる悪魔にとっては、挑戦者だけが邪魔者だから、なんとしても排除しようとする。
大きな挑戦者も小さな挑戦者も、何も変わらない。いいとかワルイではなくて、集団とは、このようになっている。
集団には愛がないから、見えざる悪魔の天下になる。人にはよくわからないが、見えざる悪魔の目指すことは、その集団の崩壊にあるから、一見、まとまっていて勢いがあるように思われていても、ある瞬間から、集団は、壊れていく。
あたりまえのことだ。見えざる悪魔は、集団を崩壊させるのだから。
唯一、この集団の崩壊に抵抗するのは、こころの愛の大きい人だ。わけもわからずに、集団を愛してしまう。
家族も集団だが、家族の場合は、愛が強いケースが多いから、家族の中に、挑戦者が現れる確率が高い。家族は、なかなか滅びにくい。フツウの企業集団では、家族のようにはいかない。そんなに愛が大きい人など少ない。
家族は、何代にもわたって生き残る可能性がある。だからといって、社業を近代的組織にすると、多分、１代で終わってしまう。
簡単な理屈である。
家族を愛する人は確率的に多いが、単なる企業集団を愛する人など現れない。
たった、それだけの違いである。
もし、創業以来６代目の豆腐屋さんなどがあるのだったら、経営の近代化などには、惑わされない方が好ましい。
『喫水ー変革者』のテーマは、経営の近代化である。豆腐屋さんの６代目の

話しをしておいて、実際やっていることが経営の近代化では、ウソを並べているかのように聞こえる。
豆腐は世界に出かけなくてもいいが、どうしても世界に出かけないと難しい商品もたくさんある。下駄屋さんは、６代目をやったほうがいいと思うのだが、シューズを家族でやってきているのだったら、世界とは言わないが、もっと大きな場所に出かけないと生き残れない。化粧品だって、同じことだ。オートバイだって同じことだ。
しかし、基本的には、せんべい屋さんの６代目などといった、家族的集団の方が、生き残れる確率が高い。
簡単な理由であって普遍である。
見えざる悪魔と挑戦者と愛の関係である。
私は、せんべいもわからないし、豆腐もわからない。私の技は、やはり、ヒット商品の曳き人にあるから、せんべえ屋さんの手助けはできなくて、たとえば、日本のオンナのためにといった、たいそうな商品になってしまう。成果は別にしても。
企業集団の話しだけではない。学校という集団だって、何も変わらない。学校という集団は、家族的に運営されているから、なかなか、見えざる悪魔に崩壊させられない。学校を愛する人が家族のように多いという意味だ。オレが挑戦すると言ってしまう人が現れる。
見えざる悪魔も、毎年構成している人が入れ替わるから、支配が難しい。見えざる悪魔の支配は、純粋になることである。カオスを嫌う。
しかし、学校は、特に大学は、学生や職員の考えを尊重することが多い。多いだけだが。カオスをワルイとしないことが多い。
見えざる悪魔は、学校はやりにくい。滅ぼしにくい。

●人の挑戦心

ずっと集団の話しをしている。
見えざる悪魔と挑戦者と愛の関係の話しだ。この話しは、普遍である。
集団を壊そうとする見えざる悪魔と、集団を愛する挑戦者の戦いである。挑戦者は、自分もよくわからないかもしれないが、こころの愛の大きい人のこ

とだ。
愛が大きければ、必ず挑戦者になるかどうかは、また違った意味がある。しかし、逆はない。愛の小さな人は、挑戦者にはならない。よろいに従って、自分の得を追いかける。
世の中は、こうなっている。
この話しは、集団だけの話しではない。愛の話しだから、当然、個人の話しでもある。
私の中の見えざる悪魔と私の中の挑戦者と愛の関係の話しでもある。
集団は、愛がないから、集団の見えざる悪魔の好き勝手に振る舞われることが多い。だから、集団は、早く壊れる。仕方がない。
しかし、私個人には、愛があるから、私が壊れることには、愛が、直接係る。
集団の見えざる悪魔の場合は、集団の構成メンバーに、挑戦者という愛の大きな人が存在しなければ、どうにもならなかった。
私のことは、私の中に愛があるから、私は私を、私の見えざる悪魔から守れる。
私の見えざる悪魔のコンセプトも、集団の見えざる悪魔のコンセプトと同じ、純粋になることだから、時々、自己変革ということばがあるようなことをやらないと、見えざる悪魔に支配されて、私は、崩壊する。
私の中の見えざる悪魔は、私を消し去ってしまいたいのだが、私は、挑戦心を発揮して、自分の見えざる悪魔と戦っている。
私の見えざる悪魔は、私の係る集団の見えざる悪魔とタッグを組んで、私の挑戦心を、潰そうとする。
私の挑戦心を潰されたら、私は、自分の存在を自分で消すことになってしまう。豹は、存在することに意味があるから子孫を繋げることに意味があるから、自分で自分の存在を消すことなどあり得ない。
こんなおかしなことを考えてしまうのは、人間だけだ。豹に言われる。
「どういう考えをしているのかゼンゼンわからない」
しかし、私を、私の見えざる悪魔から守っているのは、愛だけだから、私のこころの愛が 5 くらいになったら、多分、私は、私の存在を自ら消すだろう。

想像できる。
切腹というおかしな因習があった。
こころのよろいの割合が95くらいになったら、こうするしか方法はなくなるだろう。
人間は、豹とは違うから、こころがあるから、こころの中のよろいの割合次第では、何をするかわからない。
私は、豹とは違うから、生き物として次に繋げたい他に、人間らしく一生を終えたい。
人間らしくという意味は、豹にはない、私の中にしかないこころのことだ。
私は、自分のこころの中が、よろいが50に愛が50になってから、一生を終えたい。
私のこころの中の愛を大きくすることは、苦難を伴う。愛が20によろいが80の人が、フツウだからだ。
たとえ小学校３年生であっても、算数が３番だったからといって、ガッカリする。こころの中の愛が50になったら、誰にも言わないが、そんなことどうでもいいと、こころで言ってしまう。競争など、見えざる悪魔の作戦に過ぎない。私を崩壊させる作戦なのだ。
愛が大きくなかったら、こんなことに気がつかない。
「あいつはどうしてオレより１年早く課長になったのか、ゼンゼン理解できない」と言ってしまう方が、フツウの人なのだ。フツウの人だ。
「オレは心棒に従って生きるからそんなことはどうでもよい」
こんな人は、愛の大きな人なのだが、村八分にされたり、いじめられたりする。
私が、私のこころを、よろいが50に愛を50にしたいと思っても、実行すると、タイヘンなことになる。
私は、もう実行している、私は、バカだのチョンだの言われることには、怒りもなにもない。よく承知している。
もう、20年くらいになる。私は、質素に暮らせるようになった。それが１番重要だ。グルメに暮らしたら、私の愛を50にすることなど難しい。
私は、まだ達していないのに、いかにもできた人間のように書いてしまうことが、腹立たしい。しかし「ブッダのようでいいのですか？」と言われた時

は、正直、うれしかった。３年前だ。
見返りを期待しないことを問われた。
人の誰にでも挑戦心があって、自分を純粋にして鉛筆の芯のように研ぎすまして壊してしまおうとする見えざる悪魔に挑戦しようとする。
多分、挑戦という言葉は、これ以外には使う必要がないのだろう。凄い人が、昔いた。

●戦う
フツウは戦わないかもしれない。もちろん、こころのよろいが80がフツウだから、フツウは、戦わない。愛が大きくなければ、戦わない。
見えざる悪魔に戦いを挑むことを言っている。人のことばの戦いは、よろいとよろいの戦いのことを指す。
桶狭間の戦いであったりする。戦争のことだ。
人は、フツウは、こころのよろいが80くらいだから、戦うというと、すぐに、よろいの戦いを意識する。ゲームでもたくさんのコンテンツがある。戦いのコンテンツだ。物語も数多くある。昔から、よろいの戦いには、多くの物語がある。
人の歴史は、戦いの歴史でもある。よろいとよろいの戦いの歴史である。
目立たないが、愛が見えざる悪魔に挑んだ物語もある。
一見、愛が悪魔に戦いを挑んでいるかのようだが、もしハッピーエンドになっているのだったら、それは、よろいとよろいのフツウの戦いである。
単なる権力争いの物語である。
愛が見えざる悪魔に戦いを挑むと、ハッピーエンドにはならない。
見えざる悪魔は、必ず、愛を殺してしまうからだ。
残念だが、人は、このようになっている。
私は、私のこころの中の愛を、50にしたがっている。それが、人間らしい生き方だと信じているからだ。
よろいに従うのではなくて愛に従って生きることだ。
私の優秀な頭脳を、どう考えるかにかかっている。あまりにも優秀すぎるから壊してしまう命題を持って存在しているのが、見えざる悪魔でありよろい

である。
確かに、あまりにも優秀だから、とんでもない兵器だって開発してしまう。見えざる悪魔に利用されてしまう。
優秀な頭脳をコントロールする方が、優秀な頭脳の先行きを守れるとして存在しているのが愛だ。
私自身は、自分の中にも見えざる悪魔と愛が存在しているのだが、私は、私の優秀な頭脳を、コントロールする道を選択している。
おかしな言い方だが、この選択の結果が、私のこころの中の愛を、50にすることになる。
私は、最後は、見えざる悪魔に負けるのだが、それか、肉体的な終焉がくるのだが、それでも、私は、自分のこころの中の愛の割合を、50にしたい。
これは、自分のこころの中で、すごい戦いをしないと、難しいことだ。
私が、肉体的な終焉がくるまでに、私を崩壊させようとする見えざる悪魔に挑んで、私の崩壊を防ぐことは、至難である。
フツウは、見えざる悪魔とは戦わないと言っているのは、集団の常識においても、集団の中で尊重されることは、よろいの厚さである場合が多いからだ。人の一生において、愛を大きくするよりも、よろいを大きくする方が、得に生きられる。そのようになっているから、人はメンドーである。
私のように、わざわざ、自分のこころの中の、愛の割合を50にしたいと思って実行に移すと、見えざる悪魔の攻撃にあって、苦しくなる。
おかしなことなのだが、こころの中の愛の大きさが20以上あると、通常は、見えざる悪魔の存在が見えるから、意識しなくても、見えざる悪魔と戦うことになってしまう。
人間の歴史は、そうして戦って見えざる悪魔に殺された挑戦者の歴史でもある。
挑戦心や挑戦者は、おかしなものである。
自分の中の見えざる悪魔と戦わなくても、生きていける。世の中、よろいの世界だから、しっかり勉強して、ブランドのある学校を卒業して、大企業かお役所に就職して、安泰に暮らすことが何よりだ。よろいにまみれた一生なのだが、『よろいってなんだ』『愛ってなんだ』などの書籍を読まなければ、よろいにまみれた情けない一生であったなどと、死ぬ間際も気がつかな

い。勲章がもらえなくて残念だったと思って死ぬかもしれない。
フツウは戦わないと言っているのは、こういうことだ。
フツウは、よろいを厚くして一生を終えるから、少し高齢になって、よろいが傷つけられると、自らの存在を消し去ることも頻繁に起きる。
年間３万人という数は、恐ろしい。すべて自分のよろいと実生活のギャップのことだ。
よろいがなければ、たいしたことだとは思わないのだが、よろいが厚いと、耐えられない。
士農工商時代には、よろいは、ほぼ武士に集中していたのだろう。農工商は、よろいが傷つくから自ら存在を消したのではなくて、多分、食べ物さえなかったのだろう。
武士は、よろいを代表した。士農工商時代だ。士農工商時代の士の愛は、20を切っていたのではないかと想像する。
少しでもよろいが傷つくと、命じられなくても、腹を切ったのだろう。
人も生き物だから、遺伝子的自分もいるわけで、その遺伝子の要請を蹴ってまで、生き残ることを無視するのだから、よろいとはすごいものだ。豹などは、人間は、生き物の風上にもおけないと思ってしまうだろう。
現代の年間３万人という数字は、恐ろしい。愛は、見えざる悪魔と戦い、危険な優秀な頭脳をコントロールしようとする。愛が大きければ、誰かのために犠牲をいとわないかもしれないが、自ら存在を消すことなど考えられない。
よろいに気がついていただければ、年間３万人が、当面、半分にできるとは思うのだが。
自ら存在を消してしまうことなどは、見えざる悪魔と戦わないことの典型である。
仕方がないとは思わないが、こころのよろいの割合が80のまま年老いてしまうことがフツウだろうから、年老いてバカにされることが多くなることには、耐えられない。
私は、３０００冊くらいの蔵書があった。本棚に並べてニヤッとしているその頃の自分を思い出すと気分がワルクなる。
よろいである。

ゴミ屋さんにすべて持って行っていただいた。
私には、もう１度読み返す時間などない。私は、Ａ４の１枚にまとめて、パソコンに収めているし、プリントして、ファイルしている。段ボール１箱にはなってしまう。
これさえも読み返さない。
思い切ったことをやらないと、私の固定観念を打ち破れない。
私は、私のこころの愛を50にしたいと願っているし実行しているので、蔵書を消してしまったりする。
こころの愛を大きくするには、他に方法がない。私のこころの愛は、よろいとシエアーしているので、よろいを少なくするしか方法がない。
蔵書をなくしたことで、少なくとも、本をたくさん読みたかったことは、単に、本棚に並べたかった理由もあったという、おかしな欲望を消し去ることができる。
今は、本は読むが、どなたかに差し上げる。
現在の、本と私の関係には、よろいが一切ない。今は、私は、自分の綴った本を読むことに必死になっている。よろいがないわけではないのだろうが、少ないと、文も綴れるから、おもしろい。
私が、見えざる悪魔と戦うことは、私の挑戦心では、こんなことだ。勇気がいる。価値観を転換しないと難しい。
更に、私が集団の挑戦者をやることは、難しい。
私のこころの愛の割合が大きくないと、集団の挑戦者にはならない。
あたりまえのことだ。

愛の作戦

●愛はどうするのか

同じ生き物なのだが、豹にはないものが人間にはある。優秀な頭脳だ。
宇宙がどのようにしてできたのか、知ろうとする。地球だって驚いているだろう。
「オレのことなど知らなくてもいい」
「単にオレの中で生きている生き物に過ぎない」
地球が言うのももっともである。
人の優秀な頭脳は、地球が、あたかも、優秀な頭脳の、単なる生活のステイションであるかのように、次第に、ふるまいはじめている。
「溢れたら行けるかもしれないから火星も調べよう」
地球は、機嫌がワルくなる。
恐竜だって、地球を制覇した時に、同じようにした。
「恐竜以外は生き物とは言えない」
「地球は恐竜の食べ物を育てている」
あたかも、地球が、恐竜の下部のように思った時点で、恐竜の絶滅がはじまった。
弾きがねは何にせよ、恐竜の思い上がりが、絶滅させた。恐竜にはこころがなかったから、見えざる悪魔もよろいもなかった。
ただ、Ｎｏ１になった思い上がりはあっただろう。遺伝子の誇りはあっただろう。
現代では、恐竜と同じような存在が、人である。もう人以外は、生き物ではないかのように、人は振る舞っている。
危ない。
人には、恐竜と違って、こころがあって、優秀な頭脳があって、見えざる悪魔があって、愛がある。
恐竜より難しい。
恐竜よりながく、地球の王者でいられるかどうか、わからない。

人の優秀な頭脳は、そんなことを心配することよりも、火星がどうなっているかに興味がある。
いいとかワルイではない。
人は、こうなっている。
人は、生き残るコンセプトで発現する発育を終えると、人として生きるコンセプトの、おもしろいを発現してしまう。
いいとかワルイではない。
人間に共通している。
おもしろいを身体に持たない人間などいない。
火星がどうなっているかについて、おもしろくない人はいない。
優秀な頭脳のコンセプトは、わからないことを明らかにすることにある。
豹は、わからないことは、そのままほっておく。人間だけが、わからないことがあると気持ちがワルイ。
わからないことが明らかにされることがおもしろい。
いいとかワルイではない。
人間は、このようになっている。
だから、人間は、地球でチャンピオンになった。恐竜が地球でチャンピオンになったのは、大きくなって強くなったからだ。
人間は、別の道を選んだ。
ここまではいいのだが、これから先だ。
恐竜は、大きくなって強くなって地球を制覇することには成功したのだが、仲間が増え過ぎて、食糧に困って、恐竜同士が食糧になってしまった。あれだけ身体が大きいと、昆虫など食べていられない。
クジラはデカイが、シャチを食べることには、まだ向かっていない。小さな生き物を大量に食べる。生き残るには、それなりの論理がある。確かに、クジラほど大きいと、襲われない。しかし、海は、クジラの食べ物を育てていると思ったら、クジラの終焉になる。
そもそも、クジラは、大きな生き物では、唯一、生き方が上手だった。陸にいたのだが、海に戻ったことだ。あんなに身体が大きいと、地球を敵にしてしまう。重力を敵にする。
水に戻って、１／６の重力で暮らさないと、難しい。

恐竜が大きくなって強くなることは、両刃の剣だったように、人間も、地球を制覇して、これから何億年か続くかもしれないが、両刃の剣がある。
恐竜の、大きくなって強くなることと同じものだ。
人間は、優秀な頭脳を更に優秀にする。
地球上の生き物は、人間のための食糧かペットになってしまう。
優秀な頭脳は、多分、どんなことでもできてしまう。
牛を、もっとおいしくするにはどうしたらいいかを実行する。
たかだか人間にとっておいしいかどうかで、命をいじられてはたまらない。
人間がいじられるのであれば、確実に反乱する。
見えざる悪魔は、優秀な頭脳の終末を描いて、実行に移すだろう。私の見えざる悪魔は、私を崩壊させないとヤバイ。私の優秀な頭脳はたいしたことはないが、地球上には、優秀過ぎてヤバイ人がたくさんいる。
愛はどうするのか。
恐竜と人間は違う。愛があることが違う。
愛はどうするのか。

●泣くってなんだ
愛は、人が動く押しボタンである。
あかちゃんが泣いて困ることがある。アパートで壁が薄かったら、お母さんは困ってしまう。
あかちゃんのこころは、愛が１００だから、お母さんを困らせようとして泣いているわけではない。そんなよろいなどは、あかちゃんにはない。
それなのに、時には、叩かれてしまうあかちゃんがいる。残念だが、お母さんのよろいは、相当なものだ。自分がイライラしてしまうということだけで、あかちゃんが叩かれてしまうこともある。泣いたりしたらヤバイのだが、そんなことはわからない。
それでも、フツウのお母さんは、あかちゃんが生まれる前後しばらくは、お母さんのこころは、愛が25とか30になってしまう。よろいが、少し追いやられることがフツウである。
あかちゃんは、自分で何もできないから、ワシが飛んできても逃げられない

から、泣いてお母さんを呼ぶしかない。ＳＯＳなのだが、なんか違うふうに思われている。ＳＯＳだから、あかちゃんの泣き声は、鼻から出ていて、揺らがない。
揺らがないという意味は、冷蔵庫のブーンという音や電車の音である。心臓の音も河原のせせらぎの音も、みんな揺らぐ。自然界の音は、波のように、小さくなっていく。冷蔵庫の音などは、小さくなっていかない。
人にとって、揺らがない音は気持ちがワルイ。聞きたくない。あたりまえのことだ。
あかちゃんの泣き声は、揺らがない。不思議なことなのだが、人が出している音なのに揺らがない。すごいことなのだ。
あかちゃんの泣き声が揺らいだら困る。
狼が目の前にいて泣き声を上げるのだが、せせらぎのように揺らいで、「ちょっと待ってて～」などになったら、喰われてしまう。
あかちゃんの泣き声は、緊急信号なのだ。消防自動車のサイレント似ている。
残念だが、こんなことを知っているお母さんは少ないので、あかちゃんが泣きはじめると、自分の耳もふさいでしまうことさえある。
そもそもあかちゃんとお母さんは、こういう関係で成り立っている。
こういう関係ではわからない。
あかちゃんは、豹のように、生まれてすぐに立ち上がれない。１年くらい寝たままだ。
大昔のお母さんは、寝たままのあかちゃんの方が守りやすかった。何よりも、あかちゃんを優先した。大昔のお母さんではなく、人間のお母さんは、そもそも、あかちゃんを守ることを１番にした。現代は、やはり、少しおかしくなっている。お母さんのこころの中の、愛の割合が、もっと大きくなるはずなのに、あかちゃんが期待するほどに、お母さんのこころの愛は大きくならない。
これだったら、馬のように、早く立ち上がることを選択した方が良かったかもしれない。
そう思っても、もう遅い。
馬などは、狼が来ても、決して泣かない。じっとしている。人間だけがおか

しい。狼に知られてしまうのに、大きな声で泣く。
それほど、あかちゃんとお母さんの信頼関係が厚い。馬などは、歩けるのだから自分で狼から守れと言ってはいないのだろうが、雰囲気、そうである。
あかちゃんのこころの愛は１００なので、あかちゃんの唯一のＳＯＳである泣き声も、愛から出ていることは間違いない。
これを、「わたしの眠りをジャマする」と思われたら、人間のあかちゃんとお母さんの関係は、成り立ちにくい。
ホントはおかしいのだが、お母さんは、もっとあかちゃんと自分の関係を学習した方がいいと思う。それだけで、あかちゃんに手を上げる回数が減ることは間違いない。
あかちゃんが泣くことは、以上のとおりなのだが、大人が泣くことはなんだろうか。
多分、同じことばを使ってはいるが、あかちゃんが泣くことと大人が泣くことは、大きく異なっているのだろう。
大人の泣くことは、なみだを伴っている。

●なみだってなんだ

あかちゃんのこころの愛は１００だから、あかちゃんは、泣くことになみだはない。
あかちゃんが泣くことは、ＳＯＳだから、なみだとは関係がない。
大人の泣くことは、なみだを伴っているので、大人の泣くことは、なみだが何であるかを考えた方が好ましい。
なみだは、愛の戦略的武器である。
愛は、こころの中のよろいと愛の割合を変えたい時に、なみだを戦略的武器として使う。
人がなみだを流すと、こころの愛の割合が大きくなる。ほんの少しであっても、よろいが少なくなって愛が大きくなる。
これが人のなみだの本質である。
もし、よろいが95くらいになってしまったら、愛が５くらいしかないので、愛のなみだを流させるチカラも衰えてしまうことがある。

「この人はもう難しい」と思ってしまうことがある。そういう状態の人がいる。こころの愛が５によろいが95くらいの人のことだ。
見ていてわかる。とてもなみだを流してはくれないだろうと思える。こころに、なみだが流れるスペースすらないことだ。
愛の戦略的武器が使えない状態のことだ。
時々、テレビで見かける人にも、「もう何年もなみだがないだろうな～」と言わせてしまう人がいる。周辺の人がタイヘンである。
こころの愛が80もあったら、なみだを流さないだろうと想像する。私は、こころの愛が80もなったことがないからわからない。
多分、ブッダは、なみだを流さなかったと思う。
愛が大きいのだから、愛の戦略的武器であるなみだを使って、さらに愛を大きくすることなど、必要ない。
私は、愛が50になってから死にたい。
愛が50は、どうなのだろうか。
愛は、けっこう頻繁に、なみだを使うかもしれない。
オセロゲームに似ている。
なみだを流して、黒いコマ３つ分を白いコマに変えようとする。具体的な、愛の戦略行動である。
問題なのは、黒いコマ３つ分のよろいがあったことになる。
だから、なみだを流す人は、よろいの割合がいくつかに関係なく、よろいがあることになる。よろいがなかったら、なみだはない。
ファン投票でセンターを決めたりするグループがあって、全員、大泣きになる。泣くことではなくて、なみだがとめどなく流れる。
みんな、あの人には負けたくないと、よろいがイメージしてしまっていたからだ。
どう考えても、よろいが少し厚くなる状況である。ファン投票のランキングが発表されるまで、なみだなんかはない。
ランキングが発表されると、一気に、愛が、戦略的武器を使う。よろいが負けたくないとイメージした分だけのなみだが流れる。
終わると、それでイーブンになる。
なみだとはこういうものだ。

もし、ランキングが発表されて、なみだを流す場面が用意されていなかったら、最悪になる可能性だってある。なみだが流れてイーブンになるまで、よろいが多くなって愛が少なくなっていたのだから。
次の投票がフェアーに実施されるかどうか疑わしくなる。
なみだとはこういうものだ。
素晴らしい。
フツウの人のこころは、よろいが80に愛が20くらいだろう。誰でもが、よろいの方が圧倒的に厚い。だから、フツウの人は、頻繁になみだが流れる。
テレビドラマを見ていても、なみだが流れる。
自分のよろいに重ね合わせるからだ。
私は、自分の書いた『壊れるよろい』の最後の２ページを何度も読む。なみだがこぼれる。私の中のよろいがわかりやすいからだ。なみだがわかりやすい。愛がわかりやすい。
なみだは、いろいろな局面で流される。オリンピックで流れるなみだもある。苦労を共にした人であれば、必ずなみだが溢れる。きっと、思ってはいけないことだってイメージしただろうから。
勝つためのよろいが厚くなってしまっただろうから。
なみだがなかったら、イーブンにならない。元に返らない。
「今日でバイバイだから」と言われて悔しくてなみだになる。悔しなみだは、生きていたら山ほどある。
もし悔しなみだがなかったら、こころは曲がってしまうだろう。曲がらなくても、よろいが90にまでになってしまう。
福島の原発近くの人は、故郷を失ってしまったのだろう。ながく住んでいた人は、夜など１人になると、なみだが流れる。
もし、あまり考えないで反対もしなかったのだったら、自分のよろいにガッカリする。
だからなみだが流れる。後悔のなみだだ。
なみだって素晴らしい。
よろいが90になるのを抑えてくれる。
最近子どもの演技者が、簡単になみだを流すのをテレビで見たりする。演技でなみだは流せるのだろうか。

それはない。
なみだはなみだだ。
子どもなのに、なみだを流す状況を、イメージで簡単につくり出せることがグッドだ。子どもでも、よろいがなければなみだにはならない。
愛が１００のあかちゃんには、演技ができない

●不覚のなみだ

私は、ながく会社で働かせていただいた。私は、最初は、ビジネスになみだは似合わないと思っていた。したがって、私は、ずっと、なみだを流したことがない。
ある時、信じられないような理不尽なことがあって、私は、30になっていなかったが、陰のスタッフをやっていた。陰の権力者だった。
不覚にも、思わず、人前でなみだを流してしまった。
私以外のみんなは、すごく驚いた。私は、そういう人間ではないと思われていたからだ。会社の目的を冷徹に追えるから、若くして、陰の権力者になったと思われていた。
この件があって以降、私をとりまく、いくつかの流れが変わった。
私は、今は、会社というものは、育てるコンセプトで運営されるべきだと思っている。会社は、君主時代のシステムを残しているせいもあって、市場という場で、狩りを必死に行うかのように、とらえられている。
マーケットで勝ち続けないといけない。チャンピオンにならないといけない。
当然のことながら、よろいが80以下になったら、敵を倒すといった雰囲気にはならない。
私が勉強した経営学なども、いかにして敵に勝つかを学んでいるようなものだ。
私は、当時は、このような考えだった。つまり敵を倒さないといけない。それがビジネスである。市場で敵よりも、大きな鹿を狩ることだ。
こんな状況で、人前でなみだを流したら、雰囲気は一転する。
今は、私は、「もう狩る鹿もいないのだから育てるしかないでしょ」と言っ

ている。
会社は、育てるコンセプトが根にないと、生き残れない。狩ってばかりいると、隣の畑からパイナップルを盗むようになってしまう。隣の牧場を襲ってしまう。
もう、地球に、狩るものなどない。
狩ると育つとは、よろいと愛の違いほどに、生き方が異なる。愛がなければ、何も育たない。愛などあったら狩りはできない。
サンフランシスコの田舎風のおじさんは、何兆円もの売り上げを狩って来たわけではない。自分の中で育てた。
70年前の日本が、戦争ですべてを失った時、狩るモノが何もなかった時、日本の田舎風のおじさんとおばさんは、必死になって、明日の食べ物を得るために、育てた。
新しい生活のシナリオライターが、たくさん生まれた。
ほんのしばらく前まで、たった１発の銃弾でバイソンを倒すヒーローの映画が流行っていたのだ。これが、会社の流れであって、今も、たいして変わらない。
今は、一発の銃弾でバイソンを倒したら、会社の経営者だったら、非難を浴びて、会社を潰してしまうかもしれない。
すごく大きく流れは変わったのだが、しかし、根が変わったわけではない。
福島の原発の事故があって、生活している人は、悔し涙を含めて、なみだが止まらない。
しかし、狩りの世界で生きている一方の人達がいて、彼らは、決してなみだを流さない。
すごいまずいことになったと後悔はしているんだが、福島の生活者のように、なみだは流さない。
依然として、私が30歳の時に、人前で不覚にも流したなみだと同じ感覚なのだ。
これは経済戦争なのだと思っている。なみだはふさわしくない。だから、だれも、あれだけの事故なのに、生活者以外の誰もなみだを流さない。
あれだけの事故なのに、福島の生活者になみだが溢れて、こころの愛の割合が高くなったのだが、一方の人達は、何も変わらない。愛が大きくならなけ

れば、謝ることもしない。
よろいとは、そういうものだ。
私も、以前は、同じような考えをしていたので、よくわかる。心境がわかる。
しかし、私は、今は違う。
育てるコンセプトにしか、会社の生き残る道はないと思っている。
愛が大きくなければ、育てることなど難しい。
時には、愛が、もっと大きくなって欲しくて、なみだを使うこともある。
戦国時代に、理不尽なことがあったとしてなみだを流していると、その場で切り捨てられそうである。
人ですら、育てるものではなかった。狩ってくるものであれば、簡単に切り捨てる。
私は、見えざる悪魔やよろいを見極めて、挑戦者になっていった。挑戦者になると、何度も牢に入るか殺される。それも覚悟した。それは、愛するものを壊されたくないからだ。
もう地球は無限と思われていた時代とは異なっている。２時間もあったら１周できる。狩り合いをやったら、戦争が絶えない。これから戦争をしたら、人間は生き残れない。
私は、30を越えて、集団を滅ぼしてしまう見えざる悪魔やよろいと戦うことになった。挑戦者は、当然のこととして、こころの愛が大きい。愛は、私のこころの愛をもっと大きくしたくて、なみだを使う。
私は、なみだの真の理由を知っている。よろい的に、みっともないなどとは言わない。
福島のあれだけの事故があって、申訳ないと誰もなみだを流さないことが、不思議なのだ。なみだの真実を、誰も知らない。
じっとガマンをして、こらえる。
バッカじゃないかと思う。
こころのよろいを80に維持しないと生きていけないのだから、そうするだろう。私が30の頃と変わらない。
多分、会社は、ずっとこのままだろう。組織からして君主時代のままだ。生活者とは、大きく乖離してしまう。一般的な会社論などに意味はない。現在

の権力者を、生活者と認識するかどうかだ。自ら君主的組織に存在するから、一般的会社は、もう難しい。
社長であっても、会社の中で生活者の１人にならないと、この、生活者と君主という乖離を縮められない。
観察するに、日本では、会社は、生き残れないかもしれない。
いまだに、人前でのなみだで、切り捨てられるかもしれない恐怖を持ってしまうこと自体が、秀吉の時代と何も変わらないと思ってしまう。
日本は、もう難しい。
大転換をしないと難しい。
こころの愛の割合が、20以上になりにくい話しだ。

人は変われるか

●人は変われるのか

多分、人は、ほっておいたら、自らを滅ぼすだろう。それほど、人の優秀な頭脳はすごい。本当は、人の元締めであるだろうゲノムさえもいじってしまいそうだ。
ゲノムだって驚いてる。
たったここ１００年くらいの話しだ。
オレが元締めだから余計なことをするなと言ってはいるのだろうが、聞き入れない。
月がどうなっているのか、火星がどうなっているのか、そんなことはどうでもいいと、ゲノムは思ってしまうのだが、優秀な頭脳は違う。どんな犠牲を払っても、火星にカメラを持ち込みたいのだ。
ゲノムは、心配しているだろう。
元締めの座を、遠くない時期に、優秀な頭脳に奪われる。
人の元締めが優秀な頭脳になったら、ゲノムの詳細など、火星の写真と、何も変わらないものになってしまう。
それは違うだろう。
なぜ人間にはシッポがなくなったのか、これだけ見ても、すごい経緯がある。ものすごい長い年限がある。たった１００年やそこいらで、わかったようなことを言ってもらっても困る。
ゲノムは、明らかに、優秀な頭脳に対して不快感がある。
恐竜も滅んでしまったのだが、恐竜には優秀な頭脳が与えられなかったので、明らかに、ゲノムの作戦の失敗だったのだろう。
大きくなってしまえば、誰も怖くなくなる。
優秀な頭脳があれば、重力を計算できていたかもしれないが、残念なことに、恐竜には、計算ができなかった。
確かに、地球のチャンピオンになったし、気の遠くなるほどの長い年月、恐竜のチャンピオンの時代は続いた。

ある時、突然にそれはやってきた。
あれだけ大きいから、食べるものがなくなったのだ。あたりまえのことだ。
残念だが、地球で生きるということは、他の命を食するという意味でもある。これは地球の掟なので、オレはやらないと言うわけにはいかない。
恐竜が仲間を食べなければ生き残れないことが、ある日突然に起こっても、不思議はないというか、あたりまえだろう。
コモドドラゴンさえも、あんなに少ないのに、仲間を食べる習性はなくならない。現代である。
人間は、世界的な食糧危機になったことがないから、仲間を食べない。しかし、平気で仲間を殺す。
それも、生き残るためではない、優秀な頭脳が殺ってしまう。残酷である。
戦争などあると、１人や２人を殺るのではない。人が途絶えるのではないかと思えるくらいまで殺る。広島や長崎などは、信じられない。
恐竜が仲間を食べると、いかにもオレ達は違うという目線で話すことに意味はない。
恐竜に笑われる。広島に原子爆弾を投下したらどうなるか、誰だって理解できる。今は、誰だって理解できるから、これからは、できないかもしれない。よろい次第だ。よろいは、哀しい。
恐竜と人間は、地球のチャンピオンになった同士だ。
チャンピオンになったら、他の生き物が少なくなるから、おかしなことが起きてしまう。
人間のゲノムだって、人間が人間を襲うことなど考えなかっただろう。唯一あるのは、メスをめぐってオスを襲うコトがあったくらいだろう。
もう、人間が地球のチャンピオンになって、相当の年月になる。恐竜の年月に較べたら、まだ短いかもしれない。恐竜の時代は、なんたって１億６０００万年も続いたのだ。
人は変われるのか。
食べるのではないのに仲間を殺してしまう習性を変えられるのか。
そもそも、天下統一なることばなどがあることが、おかしい。恐竜から見るとおかしい。
ティラノサウルスが最強の恐竜ではないかもしれないという話しもあるが、

とにかく、恐竜の中で最強になった恐竜がいる。
最強でなかったら、喰われる恐怖から逃げられない。
人間は、単に、美濃を手に入れたいから、武器を持って、攻め込んで、人を殺すのだ。
そもそも、集団で暮らさないと、鹿にも敵わないのだから仕方がないのだが、集団の生活がおかしくなってしまった。
ボスになりたい欲望がエクスタシーになってしまった。
恐竜から見たら、バカバカしい。
美濃の国を手に入れてどうしたいのか、意味がわからない。
日本の人の習性ではない。アジア人なのにヨーロッパもオレのものにしたいと攻め入った人もいる。
集団のリーダーになりたいエクスタシーは、余計なことだった。恐竜から見たら、わけがわからないだろう。
２時間もあったら地球を１周する時代に突入しても、まだ同じことが続いている。
恐竜は、１億６０００万年も地球でチャンピオンだった。一気に滅んだのだが、滅ぶまでチャンピオンだった。
多分、地球でチャンピオンであるということは、こういうことなのだろう。
こういうことではよくわからない。
他の生き物に対してよろいがあるという意味だ。
人間は、死ぬと墓に入ることにまで、短時間に昇華した。昇華なる言葉はおかしいが、他の生き物が近くに寄れなくなった。そういう意味だ。
墓に入れられたら、食糧にはならない。
決しておまえたちの食糧などにはならないという宣言ではある。
恐竜も身体が大きいから、食べ尽くすという意味で凄かっただろうが、人間も凄い。墓に入るのだ。もう生き物ではないと言っている。
もう、人は、フツウの生き物に戻ることは難しい。
曖昧にしない方がいい。
恐竜も思ったであろう。
恐竜がいて、その他の生き物がいた。
失敗したのは、恐竜同士も、その他の生き物になったことだった。そした

ら、恐竜はゼロにまでになる。
人間だって、人間がいて、他の生き物が地球にいる感覚は、恐竜と同じ感覚である。
こういう感覚は、チャンピオンでしか味わえないヤバイ感覚なのだろう。
恐竜が１億６０００万年ものながい時間に、純粋になっていったと同じように、人間も、鉛筆の芯を研ぐように、尖らせる。
人間は、いまのままではまずい。
変われるのだろうか。

- １億６０００万年と４００年

恐竜は１億６０００年も地球のチャンピオンであったために抱いてしまったであろう、オレはお前達とは違うという感覚は、オレとお前を、個にまでにしてしまったら、最後は、オレとおまえになる。
ゼロになる。
恐竜には、こころがなかったから、見えざる悪魔がいなかった。美濃を手に入れたいなどとは思わなかった。日本を植民地にしたいとも思わなかった。
人間は、恐竜とは、かなりやり方が異なる。
ずっと、いまだに、人間は、あまり変わらない。
桶狭間の戦いは１５６０年だ。今は２０１３年だ。たった４００年しか経っていない。１億６０００万年に較べたら、怖ろしく短い。紀元前にも同じようなことがあったのだから、４０００年にしても、１億６０００万年とは較べることができない。それほど短い。
ずっと、見えざる悪魔が、人間の世界では役割を負ってきた。優秀な頭脳のブレーキだ。
オレとお前を個にしてしまえば、人も、恐竜と同じように、ゼロにまでになってしまう。
恐竜とは異なっている方法である。
おかしなことなのだ。
単に、お前よりオレが優れているということだけのことだ。
恐竜のように、お前よりオレの方が強いとは違う。

強くはない、人間は、鹿にだって敵わない。しかし、集団で戦う術を持ったし、なんたって武器が凄い。
そんなことまでして美濃を手に入れたいのかと、恐竜に言われてしまう。
お前達は、地球を爆破したいのかと、恐竜に言われる。
恐竜が生きていたら、これだけで、襲われる。
人間を滅ぼさないと、オレ達は、地球で生き残れない。
桶狭間の戦いが１５６０年なのだ。
地球を爆破してしまうほどの爆弾を持ってしまうまで、たかだか４００年も経っていない。
優秀な頭脳を与える時に、カミサマは心配した。ブレーキをくっつけた。見えざる悪魔だ。
すごいブレーキだ。人間を滅ぼすために存在しているのだから、あたりまえではある。すごい。
見えざる悪魔の作戦は、純粋にして自己崩壊させせることだ。
オレが優秀だと思ってしまえば、それでいい。恐竜が、オレが強いと思ったのと似ている。
とことん追ってしまう。恐竜は、オレが１人にまでになった。
人は、恐竜と違って集団で生活するから、オレ達がお前達より優秀だになってしまう。
この時点で、恐竜も人間も、他の生き物が存在する感覚はない。
人間は、見えざる悪魔の作戦のとおりに進んでいる。オレ達はお前達より優秀だになっている。どんどん、鉛筆の芯を研いでいる。
たった70年前には、世界を２分して、どっちが優秀かを争った。チェスではない。囲碁ではない。殺し合う。
恐竜が聞いたら呆れる。
たかだか、どっちが優秀かを争うのだ。
一気に、何十万人もの命を奪ってしまう武器も開発する。
人間の優秀な頭脳は、与えられた時から、先行きは決まっていた。自らを滅ぼすまで優秀さを研ぎすます。
見えざる悪魔は、人間を滅ぼして、それを防ごうとする。
見えざる悪魔の作戦のとおりに進んでいるのだが、間に合うかどうかわから

ない。
桶狭間が１５６０年なのだ。
１００年あったら、優秀な頭脳は、どんなことまでやってしまいそうだ。
見えざる悪魔はガンバっているが、間に合わないかもしれない。間に合わないというより、見えざる悪魔のやっていることは、辛辣で残酷に見える。崩壊させるのだから。
私などは、見えざる悪魔に戦いを挑んでいる。挑戦者をやっている。私は、見えざる悪魔と戦っている。
そうなのだ。
優秀な頭脳が走り切ってしまうことに、見えざる悪魔も間に合わないかもしれない。確かにそうなのだが、現実は、見えざる悪魔に崩壊させられる私たちが辛い。
今度、70年前のように、世界を２分して戦ったら、人は、半分になってしまう。半分どころではないかもしれない。人を殺してしまうために開発された武器が、数多くある。
人は、そこまでやってしまうことが恐ろしい。恐竜とは明らかに違う怖さである。
もう１つブレーキがある。
愛はどうしたのだ。

●挑戦者をやっていてつくづく思う

私は、微力ながら、挑戦者をやっていた。過去形ではない。私は挑戦者だ。つくづく思う。
見えざる悪魔は強力である。人に負けたことがない。すべての人と人が運営する集団を滅ぼしてきた。
もちろん国家も集団の１つだから、国家さえも崩壊させてきた。
歴史の書に出てくる国家は、現在の国家とは繋がってはいない。
人は、残念だが、１００年くらいで繋がらなくなるので仕方がない。情報で、人は繋げようとする。そこが、豹などの、他の生き物とは異なっているところだ。

しかしながら、それさえも、見えざる悪魔は、壊そうとする。
失敗したことがないのだから、見えざる悪魔は、完璧に人と集団を滅ぼすことができる。
私などは、微力なのだが、サルにも敵わないのだが、挑戦者をしている。
私が係った会社という集団を滅ぼされることさえも、私は、抵抗しようとする。
そんなことどうでもいいではないかと言われるかもしれないが、私は、やってしまう。
それが愛というものだ。
愛は人が動く押しボタンだから、挑戦者をやると殺されてしまうことを知っているのに、挑んでしまう。
私がやっている挑戦者など、小さなものだ。ほんの微力に過ぎない。
高杉晋作などは、もっとデカイ長州の悪魔への挑戦者をやった。それだけではなくて、江戸幕府の見えざる悪魔とも戦った。
長州をどんなに愛していたか、想像できる。
悪魔が大きいとか小さいとかは別にして、見えざる悪魔と戦う辛さを、私は承知している。
なぜこういうことになってしまうかというと、それもはっきりしている。
人のこころの天秤が、よろいが80に愛が20くらいで変わらないからだ。
はっきりしている。
こころの中のよろいが80もあると、個人的に自分が生きることに有利であったら、何でもやってしまう。
パクリなどということばがフツウのように使われることも当然である。カンニングもそうだ。
これが個人だけではなくて、集団でも同じことが起きる。
たとえば、市場経済社会だから、競争の社会でもある。市場経済社会は、生活者と商品が主役で成り立っている。そして、競争原理が、それを支えている。
特許制度などが、それを、また支えている。正常な競争関係を維持したい。
オレの商品の方が優秀だと言いはじめたら、また、オレ達の方が優秀だになって、殺し合うハメに陥る。

人のこころの中のよろいが80もあるのだから、なかなか難しい。
そうかといって、独占をほっておいたら、権力に至ってしまう。市場経済社会は生活者と商品なのだが、ダメ商品でも、権力があれば、優良商品のようにふるまわせることができる。
生活者の選択を拒否してしまう。
こうして、社会は、事実上、市場経済社会ではなくなっていく。
こころの中のよろいが80もあるのだから、ほっておいたら、人は、こうなってしまう。
こうなってしまうではわからない。
自分の個人的な有利さを確保するために、ダメをグッドに言いくるめてしまう。相手は、生活者である。
もし、ダメをグッドだと言いくるめられるようだったら、その社会は、市場経済社会ではない。そういう人は、生活者でもない。昔の民である。君主がグッドと言えば、何でもグッドなのだ。
日本でも、人のこころの中のよろいが80もあるのだから、常にリスクを負っている。日本の社会のことだ。市場経済社会を支えている競争原理そのものに欠陥がある。
どうして競争原理などという、よろいのことばになってしまうのだろうか。
もっと詳しくすると、価格を含めての商品価値の高い方に、生活者の選択が流れるだけの話しだ。
ここに、競争原理などというよろいのことばを使う必要などない。
競争原理と言うことばだけで、よろいのことを言っているのではないと、注釈をつけないといけなくなる。
まだまだ、市場経済社会は、発展途上で、中身がしっかりしていない。
時々、競争原理に任せ過ぎた罪だになってしまうようなことが起ったりする。
こころの中のよろいが80もあるから、競争原理などということばはなくならない。
「あなたが作った電気は、原発でつくっているから買いたくない」
「あなたが作っている電気は原発でつくっているが安いから買うことにする」

こういう人が生活者だ。
この選択を支えているのが、競争原理なのだが、昔から、なかなか、こうはいかない。
独占的輸入権利を確保するために奔走したりする。権利を与えるハンコを押す人までも、権力者になり下げてしまう。
一方で、独占的輸入が認められないのならば、インチキをしようが何をしても、自分達の輸入する商品を認めさせたがる。
何をやっても難しい。競争原理を守らないと市場経済を支えられない。一方で、ダメなことをグッドと言ってしまう悪習を振り払えない。
人は難しい。こころの中の80もあるよろいの世界が、フツウの世界だから、難しい。
競争原理などということばが死語にならないと難しい。
競争原理ということばが死語になっても、何も困らない。生活者は、そんなことばを使ったりしない。
私は、いじめ問題などで、教育界も、ゴチャゴチャしているのを注視しているが、何が、問題の根本であるのか、承知しているつもりだ。
承知しているからといって、挑戦者をやれないのに、挑戦者っぽいことを言うつもりはない。
そういう意味だったら、やはり、高杉晋作は大きかったと思ってしまう。
私は、挑戦者をやってつくづく思うといった文を綴っているが、わかったようなニュアンスに感じる。
ただ、小さくても、事実は事実だから、私は、会社という集団の中の見えざる悪魔と戦う挑戦者のことについては、思うこともあるし、書いておきたいと思う。
多分、経営も含めての経済的な出来事の競争原理も、教育や芸術などの、他の出来事における競争原理も、同じ根のものだろうと思う。
君主と民時代を超えないと、人間社会の発展がない。人間社会と言うとおかしい。我々のだ。
一斉に、天秤は振れたのだが、天秤が振れる重要なキーワードは、競争原理だった。
競争原理は、あたりまえのように、君主と民の時代を越えるための根だと思

われている。
しかし、完全に、はまってしまった。
競争などというのは、人間が、地球でチャンピオンになりたいがために、エクスタシーとして、身体に備えてしまったものだ。
地球でチャンピオンになるまで、ひ弱な人間を根から支えたのは、競争原理だ。もうとっくの昔に、人間は、ライオンにだって負けない。
競争は、人間のエクスタシーになっているから、人間と人間の競争も厭わない。
どっちが優秀な民族であるかを争うことは頻繁である。いいとかワルイではない。これは、人間のエクスタシーなのだ。
ほんの些細なことでも、この競争のエクスタシーに火が点く。簡単に、戦争になってしまう。人と人が殺し合うのだ。
私は、昔、見えざる悪魔と戦った時は、こんなことは思わなかった。
単に、会社が、見えざる悪魔の作戦にハマって、専業になってしまうことを防ごうと思った。また誤解を生むのだが、多角化だという、よろいのことばになってしまう。
そういうことではない。
見えざる悪魔は、純粋にして鉛筆の芯を尖らせて、折ってしまいたいのだ。
多角化ではない。
こんなことは、ずっと、誰もわかってくれなかった。いまだに誰もわからない。
私は必死に、新しい魅力ある商品を社内に入れようとするのだが、「それはそぐわない」になってしまう。５年くらい塩漬けになることは、フツウだった。
挑戦者は、それでも諦めない。
「自分はどうなってもいいから、長州や日本が崩壊することは、なんとしても防ぎたい」
高杉晋作が思っていたことだ。
日本の人の多くは、どうして？と聞いてしまう。こころの中のよろいが80もあったら、疑問になる。個人的な得にならないからだ。
私も、やっていることは小さいが、根は同じである。

こころの中の愛が35はいらないかもしれない。28くらいに大きくなってくれれば、競争原理などということばを使わなくなる。優先ということばも使わなくなる。

●もっと挑戦者が現れないかと思う

私の心棒は、クリエイティブと挑戦である。私はクリエイティブだと、自分で信じたまま終わりたい。私は挑戦者をやっていると実感したまま終わりたい。
心棒だから、私の遺伝子の要請である、生き残せという指示も、キチンと聞く。私は、自ら滅びないし、後に繋げる他に、私が、人間として生きることで、最重要なことの１つである心棒を大事にする。
もちろん、挑戦者とは、見えざる悪魔と戦う人のことだ。見えざる悪魔は、私も、私が係る集団も、みんな滅ぼそうとする。
誰かが、戦わなければ、滅んでしまう。
例外などない。
私は、微力なのだが、戦ってきている。
私は、競争原理などということばを、よろいのことばと言う。成長戦略などもよろいのことばだ。見えざる悪魔の言葉である。
生活者が使わないことばだ。
現代の、市場経済社会の主役は、生活者と商品だから、主役が使わないことばを多用して何かをしようとしても、結局、それは、いずれすべてムダ事になってしまうことは、あたりまえのことである。
現代の日本では、まだ、市場経済社会でありながら、供給経済社会を色濃く残しているので、なかなか難しい。
たった80年前は、日本に生活者もいなかった。主役は生活者ではないから、戦艦大和ができてもフツウのことだ。
こういうことが、たった80年前だから、供給社会からなかなか転換しないと言ってもはじまらない。
そうこうしているうちに、その後の１００年も来てしまう。
もっと挑戦者が現れないかと思う。

私は、挑戦者をやっていて、つくづく思う。
集団の崩壊を防ぐことができるのは、挑戦者だけなのだが、ほんとんど見かけない。
「私はどうなってもかまわないが会社は残したい」
たったこれだけのことなのだが、これを実行できる人は見かけない。
カッコ良くことばにする人も見かけるのだが、そういうことではなくて、実行する人のことを言っている。
実行すると、必ず、改革だの変革だのに手を出すことになるので、しばらく牢に入ってくださいになる。それか、明日からおいでいただかなくてもけっこうですになる。
それならまだいい方だ。
とんでもないことが起ったりする。邪魔者なのだから、そうなる。
ちっともカッコ良くないのに、カッコ良く話しをされても困る。
フツウは、自分のことを優先して考える。
私は、会社の先行きを優先させて考えてくださいなどとは言わない。時々、オーナー経営者と話しをさせていただくことがある。
こういう時しかうまく話しが合わない。
私は、ベツに、株価が高くなったら儲かることもない。現実としてない。
オーナー経営者の方が、個人的利益を優先させても、「私はどうなってもかまわないが、会社は残したい」と言っていることと近くなる。
サンフランシスコの田舎風のおじさんが、１人で数兆円を稼いでいたのだが、「私はどうなってもかまわないが、会社は立派にして残したい」と言ったであろう。
「私はどうなってもかまわないが」という感覚にならない。挑戦者は、この感覚なので、すぐにわかる。すぐにわかるというか、こんな人は見かけない。
少しリスクが生じると、もう先へは進まない。
それだけならいいが、私は、何度も何度も裏切られる。知っていないわけではない。裏切られていることを知らないわけではないが、その先の見えざる悪魔の方がもっと強敵だから、至近な裏切りなど見過ごす。
裏切りを承知することだけで、戦いの程度がわかる。私を裏切る人などは、

すごい見えざる悪魔の特等生なのだ。
挑戦者は難しい。
私が辛いからと泣きごとを言っているわけではない。辛いから仲間を多くしたいわけでもない。挑戦者集団など形成させたら、一発で見えざる悪魔に狙われて殺られる。
挑戦者は、個で動くしか方法がない。ただ、話しもしないかもしれないが、暗黙の仲間がいた方が、勝てる可能性が高い。
もしかして、今、日本の電機の会社の中に、挑戦者が必要になっている会社が何社もあるだろう。
もし挑戦者が現われなかったら、歴史を終えることになる。
例外はない。
日本の多くの電機の会社にも挑戦者が必要なのだが、電機の会社以外でも、どんな会社も、挑戦者を必要としている。
「私はどうなってもかまわないが、会社は立派にして残したい」
こんな感覚の人のことだ。
高杉晋作のように、途中でいなくなることを承知している人のことだ。
少し前に、日本の飛行機の会社が会社更生法を適用して倒産して、株もゼロになった。
そして、２０１２年秋になって、再上場した。
削るものを削ってしまえば、マイナスになることはないから、削った人がすごい。人も削ったのだが、残念だっただろう。
これからもだが、お客さまである生活者と株主を含めて自分達という陰のスタッフと飛行機運営サービスという商品を、三方一両得に考えるならば、やっていけそうである。
お上がはじめたことだから、乗せてやるという感覚が抜けなかったのだろうが、今回、そこを改革した挑戦者が現れたことが凄い。
表に現れないかもしれないが、挑戦者がいたから、この株主が国家であった航空サービス会社は生き残った。
しかし、航空サービスは、山手線状態である。つまり、山手線は、商品ではなくて、物資に近い。山手線は、タダを期待される。
今後は、航空サービスの物資化の波を、理解できるかどうかだ。

ここまでうまくいった最大のポイントは、三方一両得が社内に浸透したからだ。以前は、三方の１つに、為政者っぽい権力集団がいただろう。この人達の意向が、三方の１つなのだ。
そこが、実質的にどうなっているのか、よく見えないが。
私は、この飛行機サービス会社の挑戦者が、よくやったと思う。私ごときに何も言われたくないかもしれないが、お客さん目線に会社を変えたことが、何よりも素晴らしい。
倒産する前は、供給社会の優良会社だった、今は、市場経済社会の優良会社になるかもしれない。
まだ先はわからない。
日本に挑戦者が少ない。
日本には、まだ、供給経済社会の遺物のような会社がたくさんある。特に、大きな会社がそうだ。
電気を生産している会社なども、みんな、供給経済社会のままである。三方の１つが生活者ではないことだ。会社がお客さんなのだ。しかし、会社は、またなんらかの生活者のための商品か物資をつくっているのだから、おかしな話しである。今回の福島の事故があって、はじめて生活者もお客さんの１人になったかのようだが、依然として、税金のように電気代を徴収するシステムは、供給社会そのままだろう。電気は商品なのに、税金なのだ。イヤだったら使うなと言われている。計画停電すると、すぐ言う。
多分、先行き、日本の活性化は望めない。イヤだったら使うなと言われていて、どうして消費が伸びるのだろうか。
多分、電気も水道もガスも高速道路も新幹線も飛行機も放送料金も伸びない。このすごいインフラをどうしたらいいのか、考えるだけでも頭が痛くなるだろう。人口が８０００万人になってしまうのだ。
挑戦者が、どうしても数多く必要である。
もし数多くの挑戦者が現われなかったら、日本の全体は、次第に沈んでいく。

•30 - 70にならないか

私は、『愛ってなんだ』を書いている。
愛は、愛だけで存在しているわけではないので、愛を覆い隠してしまうものや、愛の構造などの、周辺の話しが多くなる。
結論のような話しにしないといけない。
愛は、関係していることが多いので、キリがない。
人には、豹と違って、こころというものがあって、遺伝子的生き物の生き残るコンセプトだけではなくて、人間らしく一生を過ごすというコンセプトもある。
こころは、愛とよろいでシェアーされている。
愛が80でよろいが20くらいの人は、ブッダを除いて、人類史上２人しかいなかっただろう。現代には誰もいない。
あかちゃんは、ブッダよりもすごい。愛が１００によろいがゼロだ。
あかちゃんは、決してお母さんを裏切らない。時々、お母さんは、あかちゃんを裏切るが、そのことで命がなくなっても、態度は変わらない。どんなあかちゃんも、お母さんを１００％信じている。愛が１００なのだ。
ブッダに会ったことがないのだが、多分、私は、あなたのゼッタイ的な味方だから安心してくださいと言うだろう。どんな人に対してもだ。
人の根は、愛が１００であることは、あかちゃんが証明している。ブッダは、そんな人の根を、よく承知しているだろう。人の根がワルイ人など皆無なのだ。
よろいが覆ってきて、残念な人に見えてくるだけだ。
ブッダは、よくわかっているだろう。どんな罪深い人でも、その罪が、よろいであることを承知している。
だから、誰にでも、私はあなたのゼッタイ的な味方ですと言う。たとえ裏切られて磔にされてもだ。
人は、フツウは、愛が１００だったのに、愛が20によろいが80までに達してしまう。それは、急速によろいを学習することによって、こころの中の愛も覆われてしまう。
愛がゼロになってしまうことはない。
愛は、なみだを戦略的武器として持っているので、極端に、愛が少なくなることはない。

しかし、例外もある。
時々テレビで、「この人は10年くらいなみだを流したことがないのだろうな～」と、こっちが哀しくなってしまう人の映像が映る場合がある。
例外である、
なぜ、人のこころがよろいが80にまで占拠されてしまうかというと、それは、社会が、そうだからだ。
社会は、人のこころの集まったものだから、当然のことのように、愛が20によろいが80くらいの社会となる。
新しく生まれたあかちゃんも、社会一般である、愛が20によろいが80に向かって、学習することになる。人は豹とは異なる。集団で生きないといけない。狼には勝てない。
個が卵か社会という集団が卵なのかわからない。卵とニワトリの関係になっている。
どっちにしても、愛が20によろいが80に向かうコトは確かなのだ。
愛があと10くらい大きかったら、人に戦争ということばがあったかどうか疑わしい。
それくらいに、人のこころの愛の割合は大きい意味を持つ。
あかちゃんの時に、せっかく愛が１００なのに、残念は残念だ。
もし日本の中で、愛が30になるように生きたら、当然のこととして、異端者になる。
「オレにはオレの数学があるから学校で習う数学の試験など受けない」
こんなことを言ったりすると、お母さんとケンカになるし、先生ともケンカになって、友達にはいじめられる。
「あんたはなんでフツウにしておれないの？」
フツウとは、愛が20によろいが80のことだ。
もう難しい。
私は、挑戦者のまま終わりたい。挑戦者は、私はあなたのゼッタイ的な味方ですと、ブッダのようなことを言う人である。言わないかもしれないが、こころで、そう感じている人が挑戦者だ。
私など、「ブッダのようでいいのですか？」と言われて、天に昇ってしまった。「わたしとあなたの関係ですけど」と言われて、次に言われたことば

だ。
私は、自分のこころの愛を50にしたいと思っている。よろいが50だ。私は、よろいが大きくなるようなことを極力避ける。収入が多いとヤバイ。グルメに過すとヤバイ。高級な棲み家だとまずい。
よろいを抑えていれば、愛は、なみだを持っているから、大きくなろうとする。
私は、「ブッダのようでいいのですか？」と言われた時、こころが踊ってしまった。
このことは、何度も書いてしまう。
それほど、私に、インパクトがあった。
人は変われるのだろうか。
こころの愛を30にできるのだろうか。
ものすごく不安定である。
たった70年前に、世界を２分して殺し合った。そして、１発で何十万人も殺せる爆弾を２発も使った。
今では、どんなに大量のハチが発生しても、原子爆弾を使おうという人などいない。
これを、人に使った人のよろいのすごさを、よく承知しておかないといけない。
人のこころはすごい。あかちゃんではあり得ないことなのに、大人になったら、同じ人なのに、あいつには負けたくないと言ってしまう。
なんでもないことだが、愛には、勝つとか負ける概念がない。あかちゃんにはないからわかる。
人が、もし、こころの愛の割合を、30か、30でなくても25くらいにしなければ、１０００年は、続かないだろう。少なくとも、戦争ということばを死語にしないと、人は生き残れない。
愛次第である。

ホントは愛は何なのか

●愛は人を生き残せるか

愛は、人が動く押しボタンである。人に備わっている。あれこれ考えないで、人が動いたら、その動いた対象を、その人は、愛していることになる。それでよい。
これは、人に備わっていることだから、いいとかワルイといったものではない。
もう１歩入り込んでみると、その人が動く押しボタンは、なんだろうか。あかちゃんは、愛が１００である。よろいがゼロという意味だ。
それは、どうしてそうなっているのか。意味がある。
ほっておいたら、人の優秀な頭脳は、自らを滅ぼす。それは誰でもがわかっていたことだ。誰でもという意味は、カミサマや遺伝子のことだ。
なのに、人にだけ優秀な頭脳が与えられた。
人を生き残すためには、人の優秀な頭脳を、滅ぼして人を生き残こさせるか、優秀な頭脳を滅ぼさないで、コントロールすることによって、生き残こさせるかの、選択の問題である。
人の世界は、見えざる悪魔が、時々、人や集団を滅ぼすことによって、地球で、かろうじて維持できている。
愛は、なかなか、出番がなかった。
民族が丸ごと滅ぼされてしまうかもしれない理不尽な見えざる悪魔のやり方もあったのだが、愛は、じっと見守っていた。ほんのまだ１００年も経っていない。
人の歴史の中で、愛は期待をされて物語にはなるのだが、現実として、大きな動きはなかった。原子爆弾は、見えざる悪魔の仕業なので、みんなで机の上に出して、片っぱしから壊してしまおうと、感じている人はいるのだが、愛は、そこまで強くないので、なかなか実現ができない。
しかし、もう、地球が狭くなったことがわかって、「おかしなよろいだった」と反省するしかなくなってきているのだ。

人だけではなくて、生き物も、地球上でいなくなってしまう。
原子爆弾１つをとっても、こうなのだ。
世界共通の愛にならないと難しい。
愛は、人が動く押しボタンなのだが、その向こうのホントのことは、愛は人を生き残らせせることができるかどうかを、問われている。
それは、愛が、優秀な頭脳のブレーキとして人に与えられて以来の、愛の命題でもある。

『愛ってなんだ』

２０１４年春

げんじあきら

よろいについては、『よろいってなんだ』『壊れるよろい』『脱げないよろい』『ルイハシのよろい』『ちかのよろい』『心棒ー朗人のよろい』『虐待ーさじのよろい』『いじめーゆいのよろい』『無視ー太田垣のよろい』『隆家のよろい』を読んでいただきたい
見えざる悪魔については、『人と集団を滅ぼすもの』『見えざる悪魔ーわたしと私００７』を読んでいただきたい
こころについては、『こころの色』を読んでいただきたい
愛については、『まゆ』『こころの色』を読んでいただきたい
商品については、『ヒット商品』『魅力ある商品が溢れるーわたしと私００４』『生活の定番ーわたしと私００６』を読んでいただきたい
生活者については、『生活者が溢れるーわたしと私００５』を読んでいただきたい
挑戦者については、『ソウルの縄文』『ソウルのマナティ』『挑戦者ーわた

しと私００８』を読んでいただきたい

変革者については、『喫水ー変革者』『ブルーセダンとの戦いー変革者』『変革の方法ーわたしと私００９』を読んでいただきたい